

臼田町埋蔵文化財調査報告書第2集

勝間原遺跡

—千曲川水系箱清水文化圏南限集落址の調査—

昭和62年

長野県南佐久郡臼田町教育委員会

中部電力株式会社長野支店

序

臼田町教育委員会
教育長 三石 晴夫

南佐久郡臼田町の中央を南北に千曲川左岸に添って佐久甲州街道（国道141号線）が通っている。その段丘の島地一帯が勝間原遺跡である。勝間～下小田切にかけては、勝間原遺跡、丸山遺跡、栗ノ木遺跡等の縄文時代、弥生時代、古墳時代～平安時代にかけての遺跡が存在している。

このたび中部電力株式会社の送電線鉄塔の建設工事用地にかかるため昭和62年4月6日から緊急発掘調査を実施した。勝間原遺跡では①南佐久地方で最初の弥生時代後期の堅穴住居跡、溝状遺構が発掘調査された。これらの大集落は②千曲川弥生文化の米づくりの条件を考えるとはばこの勝間原遺跡が南限であると考えられることが調査により判明した。この2点の解明だけでも今回の発掘調査の大きな成果と言える。

また住居跡から出土した土器は、赤色塗彩土器の高杯の脚部と鉢・壺・甕・ミニチュア土器であり、文様は、柳描波状文、簾状文が施されていた。千曲川流域文化圏の歴史の深さを語ってくれる。その型式名は「箱清水式土器」と命名されており、千曲川流域、天竜川上流域、北関東、甲府盆地まで広く分布している。これまで佐久平では佐久市に出土が多く、赤く塗られた見事な完形品が数多く得られている。

4月14日発掘現場において町民見学会を開き発掘調査に当られた諸先生方による説明会が行われた。現地は遠く浅間山の噴煙を望み、眼下に千曲川、片貝川の清流を配し西南の八ヶ岳、蓼科の山裾に広がる段丘の一隅で参加者は、遠く古代人の生活にそれぞれ想いをめぐらせていた。本調査で佐久地方の古代を学ぶ貴重な手掛りが得られたことは、まことに意義深いものがあり、この報告書が今後多くの研究者や関係者にとどまらず広く一般の皆様にも活用され、ふるさと再発見の一助ともなればと期待を寄せている。

終りに発掘調査にあたり中部電力株式会社長野支店用地課の方々の御協力、発掘調査現場の地主さん、ご近所の方々、町文化財調査委員会、さらに佐久考古学会員の方々の多大なるご指導とご協力に厚く感謝申し上げます。

昭和62年（1987）8月

例　　言

1. 本書は、長野県南佐久郡臼田町大字下小田切字勝間494番地他に所在する勝間原遺跡の調査報告書である。

2. 本調査は、送電線鉄塔建設に伴ない中部電力株式会社長野支店の委託を受けた臼田町教育委員会が実施した。

3. 本調査は、別記（第1章）発掘調査団を中心になり実施した。

4. 報告書作成のための整理作業分担は、以下の通りである。

現場遺構実測図作成——三石延雄・篠原太郎・佐藤敏・北村太平・日向浩・島田恵子

井出正義・篠原まさよ・篠原たけ子

報告書遺構実測図の整理・トレース——島田恵子

遺物の洗浄・註記——三石延雄・篠原まさよ・島田恵子

土器の接合・復原——三石延雄・島田恵子・篠原浩江

土器の実測・トレース——篠原浩江

石器の実測・トレース——島田恵子

図版作成——島田恵子

5. 本書に掲載した遺構の写真は、島田恵子が撮影したものを使用した。出土遺物の撮影は、由井正氏（龍岡城保存会相談役）に御協力いただいた。

6. 各遺構の略号は次の通りである。住居址—Y　　溝状遺構—M

7. 住居址の記述は、検出位置と状況—平面形態—覆土—壁・床面の状態—柱穴—等—その他全体の観察—出土遺物等の順に行なった。

8. 本書における遺構実測図・遺物実測図の縮尺は、各挿図中に明記してある。

9. 図版中遺物の縮尺は土器・石器、3分の1とした。また、図版中では土器・石器の番号を簡略した。例えば第13図Iは13-1と表わす。

10. 本書の編集は島田恵子が行ない、三石延雄団長が監修した。

11. 本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センターに展示されている。多くの方々が活用することを望みます。

調査にあたり、中部電力株式会社長野支店用地課山口信雄主任および早川勉氏にあたたかいご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表します。また、地主の堀内徳夫・土屋一雄・土屋朝雄氏には調査期間中大変御世話になりました。ご芳名を記して厚くお礼申し上げます。

報告書作成において、佐久市埋文センターの小山岳夫氏に適切なご指導、ご助言をいただき、文化センター館長の北原佐久生氏・児童館の高橋泰子さんには種々お世話になった。厚くお礼申し上げます。

本文目次

題字・序

白田町教育長 三石 晴夫

例言

本文目次・挿図目次・図版目次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 白田町勝間原遺跡附近の自然環境（主として地形・地質）	5
第2節 考古学的環境	6
第3節 歴史的環境	11
第3章 層序	14
第4章 遺構と遺物	15
1 住居址	15
1) Y1号住居址	15
2) Y2号住居址	22
2 溝状遺構	33
1) M1号溝状遺構	33
第5章 まとめ	37
1 遺構	37
2 遺物	38
1) 土器	38
2) 石器	43
引用参考文献	43

挿図目次

第1図 勝間原遺跡地形図及び発掘区設定図	4
第2図 周辺遺跡分布図	7
第3図 勝間原遺跡検出遺構全体図	13
第4図 勝間原遺跡層序断面図	14
第5図 Y1号住居址実測図	15

第6図	Y1号住居址炉実測図	16
第7図	Y1号住居址出土土器実測図	17
第8図	Y1号住居址出土石器実測図No1	19
第9図	Y1号住居址出土石器実測図No2	20
第10図	Y1号住居址土器出土状態図	21
第11図	Y2号住居址実測図	22
第12図	Y2号住居址炉実測図	23
第13図	Y2号住居址出土土器実測図No1	25
第14図	Y2号住居址出土土器実測図No2	26
第15図	Y2号住居址出土土器実測図No3	27
第16図	Y2号住居址出土石器実測図	30
第17図	Y2号住居址出土状態図	31
第18図	M1号溝状遺構実測図	34
第19図	M1号溝状遺構出土土器実測図	35
第20図	参考資料実測図	35
第21図	勝間原遺跡出土土器型態分類図	41

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	Y1号住居址出土土器観察表	18
第3表	Y1号住居址出土石器一覧表	21
第4表	Y2号住居址出土土器観察表	28
第5表	Y2号住居址出土石器一覧表	33
第6表	M1号溝状遺構出土土器観察表	35
第7表	参考資料土器観察表	36
第8表	勝間原遺跡検出住居址一覧表	37

図 版 目 次

図版1	1、勝間原遺跡発掘調査区全景（北東より） 2、勝間原遺跡発掘調査区航空写真
図版2	1、Y1号住居址全景（北方より） 2、Y1号住居址全景（南方より）
図版3	1、Y1号住居址炉確認状態 2、Y1号住居址炉掘下げ完了状態 3～6、Y1号住居址遺物出土状態
図版4	Y1号住居址出土遺物
図版5	1、Y2号住居址全景（南方より） 2・3、Y2号住居址全景（北方より）
図版6	1、Y2号住居址炉 2～6、Y2号住居址遺物出土状態
図版7	Y2号住居址遺物出土状態
図版8	Y2号住居址出土土器
図版9	Y2号住居址・M1号溝状遺構出土遺物および既出遺物
図版10	1、M1号溝状遺構全景（北東より） 2、町民のみなさんの見学会スナップ

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に対する動機

勝間原遺跡は、千曲川左岸の段丘で国道141号線添いに位置し、この一帯は勝間原・丸山・栗ノ木遺跡など、縄文・弥生・古墳から平安時代にかけての遺跡群が密集している地域で、現状は畑作地であるが時代の流れで宅地化が進んでいる。

今回の調査は、中部電力株式会社の送電線路線変更に伴う鉄塔工事の計画があり、町教育委員会では61年度事業として国庫補助事業の「臼田町遺跡詳細分布調査」を実施中であったため直ちに調査団・中部電力株式会社・町と協議し、一帯は遺跡包蔵地であり破壊される恐れがあることから記録保存のため緊急発掘調査を実施することに決定した。
(事務局)

第2節 発掘調査の概要

● 遺跡名 勝間原遺跡

● 所在地 長野県南佐久郡臼田町大字下小田切字勝間494番地他

● 発掘期間 昭和62年4月6日～13日

○ 調査委託者 中部電力株式会社長野支店 取締役支店長 驚見 正見

○ 調査受託者 臼田町教育委員会 教育長 三石 晴夫

● 調査に関する事務局

三石 晴夫 白田町教育委員会教育長

三石 学 " " 総務教育課長

土屋 雅城 " " 社会教育係長

日向 浩 " " 社会教育係

● 発掘調査団組織

団長 三石 延雄 (佐久考古学会員・臼田町文化財調査副委員長)

副団長 篠原 太郎 (臼田町文化財調査委員長)

担当者 井出 正義 (佐久考古学会員)

主任 島田 恵子 (" ")

調査員 佐藤 敏・白倉盛男・吉沢 靖・黒岩忠男・篠原浩江 (以上佐久考古学会員)

協力者 北村太平・臼田 哲・桜井 功 (以上臼田町文化財調査委員)

篠原まさよ・篠原たけ子

第3節 発掘調査日誌

○4月6日(月) くもりのち晴

本日より調査を開始する。先ず現場において調査団の顔合せを行い、引続いてバックホーにより表土削平を開始する。

すぐに溝のような落込みが認められ、バックホーを追いかけるような状態でプラン確認をする。調査区は鉄塔建設の範囲で最大面積20m×20mとせまく、お昼までに溝の確認が終り、午後より掘下げに入る。溝は北から南にやや屈曲気味に通っている。

次にバックホーを西南側に移動すると、住居址らしい落込みが認められる。そのため、建設範囲ぎりぎりまで表土削平を行う。かなり大形の長方形の住居址で少しコーナーがぶどう園にいく込んでいる様子である。Y1号住居址と命名する。さらに、北西側にバックホーを入れると住居址が隣接している。Y2号と命名するが、時間となり残りの表土削平は明日に持ち越す。

○4月7日(火) くもり時々雨

本日は昨日に引続いて表土削平の残りの部分にバックホーを入れる。また、中電の山口用地課長さんにお願いして、Y2号住居址の続きの部分を最大限拡張していただく許可を得る。厚意によってかなり拡大したが、住居址の全容を検出することは無理で、3分の2で北西側の部分を断念せざるを得ない。

また、本日は鉄塔建設予定の第2地点(栗ノ木遺跡)の試掘も行なう。ここは現在りんご畑であるが、かなり傾斜地である。上方の山をくずして土を運び入れりんご畑を造成したとのことであった。東西・南北にベルトを2本入れて

トレーニングを行なう。盛り土の部分15cmを除くと、暗褐色の表土がありその面から黒曜石の剥片(4cm大)が1点出土したのみで、落込みは認められなかった。

午前中で試掘を終了し、再び第1地点へ合流し、Y2号住居址のプラン確認、および溝址の掘り下げを続行する。3時でバックホーによる表土削平および土層断面の深掘を終了する。また、ぶどう園の地主の方にお願いして、Y1号住居址のコーナーにかかっていた部分への掘り込み許可をいただき、プランをはっきりさせる。東西5m、南北7mを測る長方形の住居址となる。

溝址は夕方までにはほぼ掘り下げを終了させる。深さは北側35cmで南側は10cmと浅くなる。粘土質の固い土で移植ゴテ先端が曲ってしまう程度で、掘り下げは困難をきたす。溝底面より弥生式土器が出土し、住居址に共なる溝であることが判明する。

○4月8日(水) はれ

本日より2組に分れて、Y1号・Y2号住居址の掘り下げに入る。Y1号住居址は、I区を除くII~III区までは、ぶどうの木と支えの杭、その他耕作により住居址の覆土が削り取られ床面まで攪乱されている。また、浅く残っている部分の覆土が固く床面と間違えるようである。反面、Y2号住居址は覆土が厚く床面まで25cm~30cmになりそうである。遺物もかなり出土している。

○4月9日(木) はれ

昨日に引続いてY1号・Y2号住居址の掘り

下げを続行する。

Y1号住居址は、層序断面図の実測を行ない、ベルトをはずし床面を出す。

Y2号住居址は覆土厚く遺物の出土も多い。

○4月10日（金） くもり一時雨

本日も、Y1号・Y2号住居址の掘り下げを続行。

Y1号住居址は、壁・床面を出して柱穴、炉の検出を行なう。4箇所に規則的に配置された柱穴が見事に顕現する。また、炉も住居址北側の柱穴と柱穴の間に位置していることが判明する。

Y2号住居址は、覆土Ⅰ・Ⅱ層中より出土した遺物出土地点の実測を行ない、遺物を取り上げ、さらに床面への掘り下げを行なう。午後には、土層断面の実測を終了し、ベルトをはずす。出入口付近床面直上に赤色塗彩された高環の脚部が立った状態で出土する。环部を欠失している。

○4月11日（土） くもり時々はれ

Y1号住居址は炉・柱穴および土壇状の落ち込みの掘り下げを行ないほぼ完掘する。柱穴は左右に細長くかなりしっかりした掘り込みをもつ。炉の実測を行なう。

Y2号住居址は、床面、壁の仕上げを行ない、柱穴、炉の検出に入る。Y1号住居址と同様、4本の規則的に配列した柱穴と床面をわずか掘り込んだ炉があり、出入口部左側には土壇にしては小規模である落込みが存在し住居址の構造は全く同じである。

○4月13日（月） はれ

Y2号住居址の柱穴・炉の掘り下げを終了した後、全体の清掃を行ない写真撮影に入る。そ

の後、教育委員会文化財係日向浩氏の応援を得、調査員全員で実測を行なってはば調査を終了する。

明日は、町民の皆さんとの見学会なので、遺物は取り上げずにそのままにしておく。

○4月14日（火） はれ

本日は、午前10時と午後2時の2回にわたって町民見学会を開く。

前日より有線放送でお知らせしてあったので、町の皆さんのが大勢見学に見えた。また、騎町の佐久中央小学校5年生が社会科の授業のためにバスで訪れて熱心に見学する。今日は、町文化財調査委員会の篠原太郎委員長と副委員長の三石延雄氏が説明にあたる。調査団では前もってパンフレットを用意し、教育委員会社会教育係長の土屋雅城氏が訪れた皆さんに配布する等のお世話にあたる。

見学会終了後、遺物を取り上げ、器材を撤収して調査を終る。

○4月15日（水） はれ

遺物を取り上げた後の住居址の写真撮影を行なう。

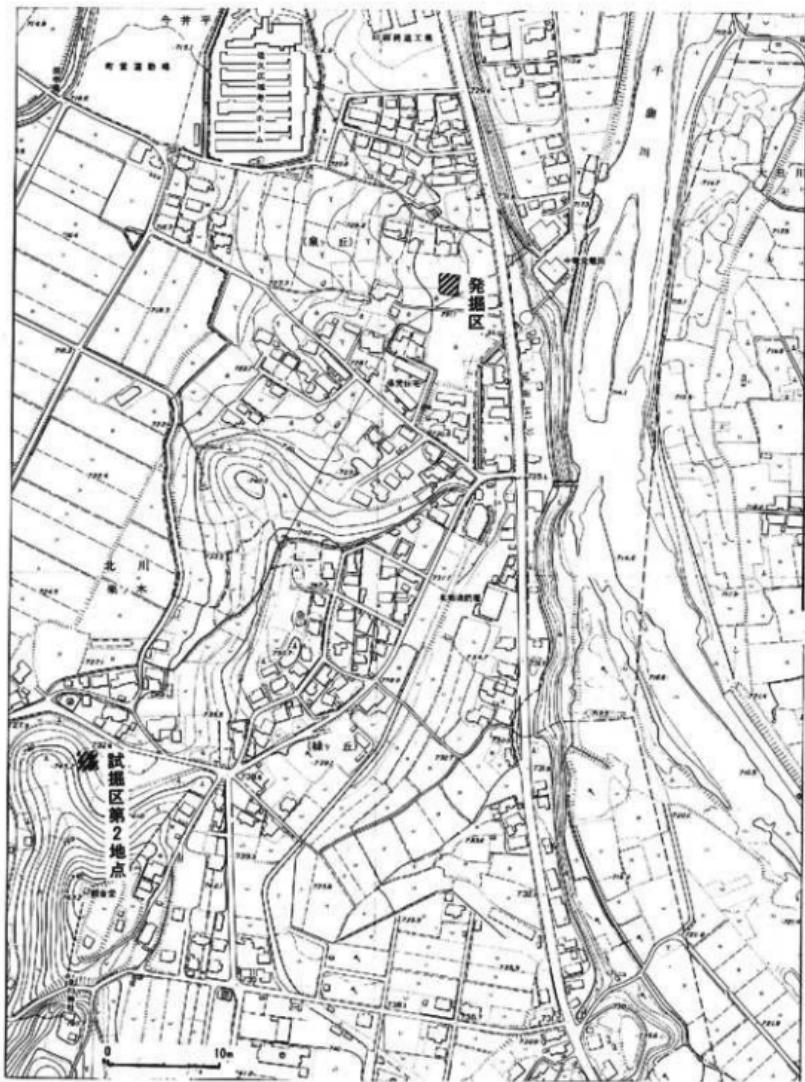
（島田 恵子）

○7月1日～20日 土器洗浄、註記、接合復原、
図面整理・トレース

○8月・9月 土器・石器実測

○9月 原稿執筆・編集・遺物写真撮影

○10月・11月 印刷屋さんへ原稿入れる。
校正・報告書刊行



第1図 勝間原遺跡地形図及び発掘区設定図（1：5,000）

第2章 遺跡の環境

第1節 白田町勝間原遺跡附近の自然環境（主として地形・地質）

千曲川は、南佐久郡川上村の甲武信ヶ岳（2,483m）北斜面から発源して川上村穂沢までは西流、穂沢からフォッサマグナの東縁と考えられている千曲川断層に沿ってほぼ北に向って佐久平を貫流している。南牧村、小海町附近を流れる千曲川は、急流で河床には径1mを越す火礫が多く散在して沿岸には僅かな河岸段丘があるに過ぎない。佐久町高野町附近になると河岸平地がようやく広くなり、標高750m辺からがいわゆる“佐久平”と言い得る平地となり稻作多収穫地帯に入る。白田町、佐久市周辺になると東西幅の最大6-8kmの佐久平となり、北へ向って逆三角形に開いている。小諸市大久保の標高550m附近の川床で上田・小県盆地に接続するわけである。

勝間原遺跡は、この逆三角形に北に向って開きはじめる佐久平千曲川左岸の白田町勝間の国道141号線西側道際に立地している。勝間附近は北八ヶ岳火山の山裾がゆるく千曲川筋までせまり、千曲川西岸は30-40mの浸蝕崖があるが、勝間の西側は小田切の広く拓けた久保平地でその真中を片貝川上流が两岸に水田地帯を作っている。佐久平の南端部にあたっており、ここからは北方に千曲川の流路と佐久平の展望・浅間山の雄姿を仰ぎ見ることができる。

この附近の地質構造を見るには、2-300m北にある稻荷山・横山附近的地質調査で実証できる。稻荷山の東端千曲川に面する急崖が垂直に近い角度で約60mの高さできわ立っている。千曲川の水面から約30cmの高さまでは旧期の荒船火山の大噴出に基く溶結凝灰岩の厚層が堆積しており、上部は水浸を受けて著しく風化ばいらんしており、下部は鉄分の水酸化による赤色化が実に美事である。この赤色化は宿岩橋下の千曲川河床でも顯著に見られる。この溶結凝灰岩の上部に重なるのが荒船火山末期の噴出物の荒船玄武岩で不規則の板状節理を見せて約15mの厚さに断崖を作っている。この岩層の堆積状態はこの東部に見える田口城山・水落観音附近の重なりと同一で連続性が地形上からも認められ、荒船火山活動期にはその噴出物溶岩は稻荷山附近まで千曲川を越えて堆積したものであることを証明している。千曲川の下方浸蝕と流路の変遷がこの急崖を作ったものである。

稻荷山の西側は相浜層と呼ばれる洪積層の凝灰岩・砂岩が堆積しており玄武岩は地表にあらわれていない。すなわち荒船山の溶岩と相浜層は稻荷山で相接し交点となっているわけである（上部に不整合に重なる）。

この相浜層は横山・浅間音堂方向に連続追跡できて淡水湖の堆積物で水平層の砂岩・凝灰岩を主として佐久平周辺山脈に広く分布しており、洪積初期には千曲川を水源とした大洪水湖があった事は既に実証されている。この相浜層凝灰岩中には松柏科植物・広葉樹の葉・メタセコイア・象齒化石など産出したことがあり、最近著名になった野尻湖象齒化層と同時期と考えられている。

洪積期のわが国は、氷河期とも言われ氷期・間氷期を繰りかえし、火山活動も盛んな時期で火山灰・火山砂・浮石層の堆積は各地に多い。火山灰砂は加水分解すると粘土化して赤土や鹿沼土となつて洪積層上部に重なっている。信州ローム・関東ロームと呼ばれているものがこれに当る。粘土と砂の混合物である。

佐久平淡水湖は稻荷山を境として南北二湖に分れていた時代もあったと考えている研究者もいる。その上流部南淡水湖に流入堆積した地層が今回の勝間原遺跡発掘の際の深掘トレンチ断面（第4図参照）に見られた砂質粘土鹿沼土状粘土の地層で時に腐植質の交雜した黒色味の粘土層も認められた。

遺跡地南方約300m附近で大戦中燃料不足対策として、泥炭を採掘した勝間泥炭坑洞は洪積期の大洪水の際に多量の草木片の流入したものが地層中に沈積して泥炭化したものを探掘したものである。

（白倉 盛男）

第2節 考古学的環境

勝間原遺跡は佐久平の南端に位置し、千曲川の左岸、比高約15mの段丘上にある。段丘の東端を国道141号線が南北に通じ、段丘の西麓は片貝川流域の平地に連なる。遺跡の西方約400mに片貝川が流れている。本遺跡から南方は両岸の山地が次第に迫って千曲川流域の平地は急速に狭まる。本遺跡から約2.5km南方の佐久町高野町の佐久西学校裏遺跡付近は、南佐久地方に於ける弥生時代集落遺跡と古墳分布の限界となっている。すなわち本遺跡は弥生後期、佐久平に優勢な分布を示す箱清水式文化圏の集落址のうち、その南辺に位置するものの一つである。しかし、千曲川と片貝川が東西にめぐり、片貝川流域低地を前面にひかえた本遺跡は弥生時代遺跡としては、極めて良好な条件をもつものと考えられる。但し標高は720mで、桜井、前山等の片貝川下流の平地部（660～670m）に比し、やや高度を増している。

片貝川は立科山系東麓の水を集めて、佐久平の西方を山麓線に沿って北流していく、長大な千曲川に比して流れがゆるやかであり、水量も比較的豊かなので、大沢、前山、桜井、岸野等の下流域の平地や山麓の谷口には弥生時代、古墳時代の集落址が多く分布し、佐久平でも古代稻作のもっともはやく開けた地域の一つと考えられる。

そのうち小宮山の後沢、桜井の下桜井北、町田等の遺跡では弥生中期栗林式土器を出土し、後沢遺跡では弥生中期住居址3軒、後期住居址27軒と方形周溝墓3基が検出されている。岸野下郷の舞台場遺跡では弥生後期後半の竪穴住居址12軒が検出され、周辺には根岸伊勢山、中村、伴野西裏、北裏等の弥生後期の遺跡がある。これらの遺跡を一望に見下す瀧の峰山頂には、古墳の発生期を示す方形台状墓が発掘調査によって検出された。これはその地方の弥生末期の集落を統合して、政治的統一を進めた権力者の墓と考えられる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表 ①

No	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
1	勝間原	下小田切 勝間	丘陵	○	○		○		昭62年4月発掘調査
2	丸山	" 原	"	○	○		○		
3	栗の木	" 栗の木	"	○			○		
4	北川勝間	北川 北川勝間	山麓				○		
5	千曲台団地	" 原	"				○		
6	広沢	" 広沢	"	○	○	○	○		
7	田島久保	" 田島久保	"	○			○		
8	城影	中小田切 城影	"	○			○		
9	南久保	" 南久保	"				○		
10	札場吉原	" 札場吉原	扇状地	○			○		
11	向城	" 向城	山麓	○			○		
12	前久保	上小田切 前久保	"	○					
13	広久保・桃の久保	" 広久保桃の久保	"				○		
14	稲荷山下	向田勝間	"	○			○		
15	向田町祇園社地	" 城下	"	○					
16	城下	" "	平地	○					
17	横山	" 横山	扇状地	○	○				
18	小山崎	" 小山崎	"	○					
19	前田	" 下前田	"		○				
20	小山	" 小山	"	○			○		
21	日影	下小田切 日影	丘陵				○		
22	見次	" 見次	"				○		
23	家浦	" 家浦	扇状地	○			○		
24	滝	滝	山麓		○	○			
25	和田	湯原和田	"				○		
26	日向	湯原・日向	山麓	○			○		
27	中島	" 中島	"		○	○			
28	台ヶ坂	臼田・台ヶ坂	"	○		○			
29	下の城	" 下ノ城	山腹	○		○			
30	寺久保	" 寺久保	"	○		○			
31	滝の沢古墳	" 滝の沢	山頂		○				径15m高3m
32	滝の沢整塚	" "					○		径12m高2m
33	七曲り下	" 七曲下	山麓	○		○			

周辺遺跡一覧表 ②

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
34	荒 谷	" 荒 谷	"	○			○		
35	滝 の 沢	" 滝 の 沢	"				○		
36	三枚平A	佐久市大沢三枚平	"	○		○	○		
37	三枚平B	" "	"		○		○		
38	前 の 保	" 前の保	"			○	○		
39	大 中 沢	" 大中沢	丘陵			○	○		
40	藏 下	" "	"	○					
41	城 山	" 城山	"	○	○	○	○	○	城山古墳・荒山城跡を含む。
42	下 町 屋	" 下町屋	平地				○	○	
43	原 遺 跡	" 原	"			○			
44	西浦遺跡群	本新町西浦、砂原 上木戸、ヤックラ田	"	○		○	○		
45	前 堀	高柳金山、腰堀 前堀、社在家	"			○			
46	原 田	白田・原田	"			○			
47	境塚古墳	" 善阿弥	"			○			径9~11m高0.5m
48	蛇 塚	" 源吾庭	"	○	○	○			蛇塚古墳を含む。藤手 刀出土、60年清掃調査
49	美里在家	" 美里在家	"	○	○		○		
50	中 反 田	大奈良・中反田	"						時代、器種不明、開田 の駆逐銅出土
51	芝 添	清川・芝添	平地	○					
52	金 石	大奈良・金石	"	○	○		○		
53	山 崎	田口・原	"		○	○	○		
54	原	" "	"			○	○		古墳群を含む。
55	幸神古墳群	" "	"			○			6基
56	外九間古墳群	" "	"			○			3基
57	中原古墳群	" "	"			○			3基
58	西 塚 田	三分・西塚田	"			○	○		
59	田 中	田 中	"		○	○			
60	戸 井 口	戸 井 口	"	○			○		
61	井 上	井 上	"	○	○	○			昭和48年発掘調査
62	寺 久 保	寺大久保	山麓	○	○			○	
63	荒 卷	荒卷、薬籠田	"		○	○	○	○	
64	小 山 沢	小山沢	"	○					
65	入沢古墳群	入沢	"			○			五箇西古墳昭和61年発 掘調査品等出土
66	月 夜 平	月夜平	丘陵	○	○	○			古墳群を含む。

臼田町の弥生時代の遺跡としては、片貝川流域に法印塚、美里在家、下ノ城、七曲り下、丸山、横山、広沢等の遺跡があり、勝間原遺跡を含めて、小田切、湯原の片貝川流域平地をめぐる周辺の台地上には弥生後期の遺跡が多く分布することを示している。

千曲川の東岸、田口、青沼地区の弥生時代の遺跡は離山、金石、明法寺、割塚、上神原、田中、寺久保、井上、柴籬田、月夜平、一つ石岩陰等であるが、離山からは、箱清水式土器底部、人骨片と共に青銅製の円環（銅釧）4個が出土している。弥生時代青銅器の出土は佐久市野沢の社宮司遺跡から硬玉製勾玉、細形管玉や鉄斧と共に、多紐縄文鏡の破片を利用した白銅製ペンダントが発見されていて、全国的にも貴重な資料となっている。

弥生時代に先行する縄文時代の遺跡は、勝間原の周辺では船荷山下、横山、小山崎、小山、家浦、栗ノ木、日向、広沢、田島久保、城影、向城、札場吉原居村遺跡等片貝川周辺の台地はもとより、片貝川ぞいの平地中央の微高地にまで密度の高い分布を示していて、縄文人と片貝川の漁撈との関係が考えられる。

また、弥生時代につづく古墳時代をみると、臼田地区の古墳は蛇塚、法印塚、境塚のほかは、白田山頂の滝の沢に古墳と思われる塚が認められるだけであるが、蛇塚古墳からは奈良～平安時代初期に用いられた藤手刀が出土して注目される。藤手刀は柄頭が藤の若芽のようにまがっているのでこのようによばれるが、発見地はほとんど東日本に限られていて、大和朝廷の蝦夷征討軍の兵士が使用したものともいわれるが、古墳から発見されることが多く、臼田町では新海神社に隣接した田口の英田地畠古墳からも出土している。千曲川東岸の田口・入沢地区には古墳群があって50数基を数えるが、入沢五雲西古墳からは昨年の発掘調査で、銅製鉢帶具が出土した。これは7世紀代の終末期古墳に対して8世紀代になって追葬されたものと考えられる。鉢帶とは鉢という飾り金具をついた革帶のことで、銅の鉢帶は六位以下の位のものに用いることを許されていたが、五雲西古墳の鉢帶はかなり良質のもので、郡司級の有力者の用いたものと考えられる。このような相次ぐ貴重な発見によって臼田町の古墳の再検討が必要となっている。勝間原遺跡の周辺の小田切、湯原地区では、古墳時代の遺跡は前田、滝、広沢等にわずかにみられるが、古墳は確認されていない。

平安時代になると遺跡数は急激に増加して、片貝川や滝川ぞいの小台地や沢ごとに分布し、観音平の奥の藪ヶ窪、町屋形、坂さ帰り、大岩穴洞窟のような山間地にまでみられ、そのほとんどが縄文遺跡と重複する。本遺跡の所在する勝間原台地の周辺でも同様であるが、勝間原、丸山、横山等の遺跡では弥生と平安の重複がみられる。

（井出 正義）

第3節 歴史的環境

通称勝間原は、臼田町大字下小田切字勝間の地である。今回勝間原地籍の発掘調査を行った結果、ここに弥生時代後期、今からおよそ七百年前の住居址が確認され、当時ここになにほどの住民のあったことがはっきりした。しかし、それからひきつづいての歴史ということになると、たどるべき資料とてなく、最近ボツボツと住宅が立ちはじめたが、おそらく長い間山林又は畠地として経過してきたものと考えられる。勝間原と呼ばれるのは、人家のとぎれた地帯に名づけたもので、古くからの無人地帯を示している。

北方の臼田村から上り坂となり、南方の宿岩村へ下り坂となる台地上で、両村集落地との標高差50mの地点であって、水利を欠く自然条件から住居地にならなかつたのである。ただ、此の地籍を古くから佐久甲州道が通じていたので、住民はなくとも往来の旅人は多かったわけでここが街道筋の休憩場所となって、古い旅館があり、旅人の目じるしとなつた榎木の古木が残っていたが、先年の台風で倒れたのは惜しまれる。以上この地点の歴史といつても記しようがないが、ここは旧下小田切村と旧勝間村との接点となつてゐるので、参考までに両村の歴史の大要を記しておく。

下小田切村

「一遍聖鑑」の弘安二（1279）年、諏訪社頭役結番之事の嘉慶四（1309）年等に記されている小田切の里、小田切氏の小田切とは現在の臼田町大字中小田切である。中世以来小田切郷といわれてきた小田切村に、中世末片貝川にそって二つの枝郷ができ、上流の一を上小田切、下流の一を下小田切と呼び、区別するために本郷の小田切を中小田切と称するようになった。中世末期にはいずれも一村をなしている。天正十四年依田康國領時代に三五〇貫、慶長十五年四一六石の村となつてゐる。しかし、周囲の各村にきびしく境界されて開発地は狭く限られており、片貝川流域の平坦地を水田、勝間の台地を畠地に開拓するだけで、山林もなく、農村としての発展性に欠けていたため、近世を通じて五十戸限度の村で推移し、明治22年臼田村と合併している。

勝間村

この村については二つの伝承がある。

一、書紀宝龜三（772）年の條に小月王信濃に流され、この年勝間田の姓を賜ひ復籍す。とあり、これ勝間村の故事ならんと「信濃地名考」に記している。

二、もと田古屋と称する小村落なりしが、天文年中武田信玄信州攻畧の際田古屋城に陣し、勝つ間に留まるべしといい、やがて望みを達したので、勝間城と改め同時に村名も勝間村となす。「南佐久郡志」

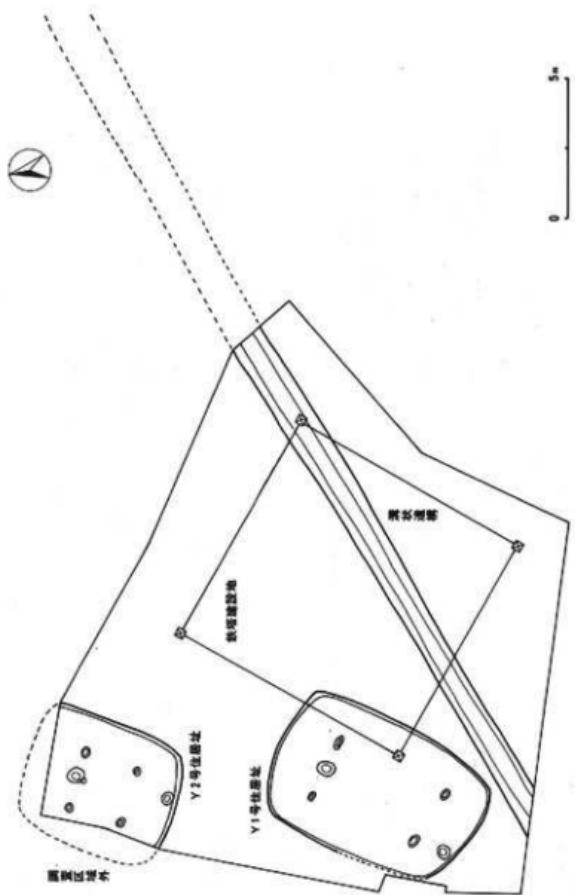
これらの伝承はともかくとして、水辺の草真菰の別名をカツミという。思うに千曲川のほとり低地で真菰が群がつておつたため、カツミムラと呼ばれ、それがカツマに訛して地名から村名になつたものかと推考している。

村の発祥は不明であるが、天正十四年依田康国領時代五〇貫、元和八年八十七石の記録が残っている。北に稲荷山、南は台地、台地東側下の千曲川べりの細長い平地が耕地をなしている。字地としては、城山、田古屋の二地区だけ、一村二字という村は南佐久には外にない。なお千曲川の水害史は、郡志に記すところ、中世から近世にかけておびただしい回数を重ね、江戸から明治期だけで八十回に及んでいる。その度に田古屋水田地籍は流失水荒を繰り返してきたであろう。しかし、記録によって判明する分だけでも四百年近い間一村としてつづき、明治初年において戸数二〇人口七四、同22年臼田村と合併している。

伝承の上から、立地の上から、勝間村は問題の多い、又、謎の多い村といふことができる。

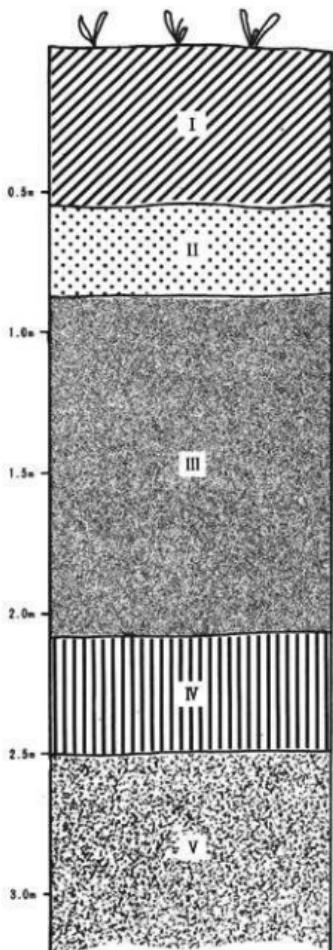
以上、下小田切村、勝間村の歴史といつても、せいぜい四百五十年間のそれに過ぎず、それ以前の勝間原の状況は、ただ想像をもってするの外はなかったわけである。今回の発掘調査によって、遠くさかのぼるこの地の歴史が解明され、千曲川西岸の近くにある蛇塚古墳との時代的接続が可能になったことは、臼田町の歴史上にも大きな意義がある。

(権原 太郎)



第3図 勝間原遺跡検出遺構全体図 (1:200)

第3章 層序



第4図 勝間原遺跡層序断面図 (1:20)

勝間原遺跡の調査においては、中部電力株長野支店用地課山口信雄主任の御理解によって地層断面観察のための溝を地下3m付近まで深掘させていただくことができた。

これによって、地形・地質の節で白倉盛男氏が記述しておられるように、洪積初期千曲川を水源とした淡水湖に流れこんで堆積した地層が明確に観察された。

遺跡一帯の土層は、粒子緻密・粘性の強い土層で小礫はおろか礫は全く含有されていないコチコチの固い層を形成している。

I層（褐色土） 耕作土 層厚50cmを測る。
場所によって20cmと浅くなる。

II層（黄色土） ローム地山層、この層を掘り込んで住居址等の遺構を構築している。
層厚30cmを測る。

III層（黄褐色土） ローム層中に砂粒子多量含み、淡水湖流れ込みの礫は白粘土化している。植物破片少量含む。層厚120cmを測る。

IV層（黄灰褐色土） ローム層（粘土）が多く粘性強い。径0.2cmを測る砂粒を多量含み、腐植片も少量混入。層厚40cm。

V層（灰褐色土） 粒子の粗い土層で、凝灰岩等の酸性の礫が粘土化したもの。中には未だ灰色・赤色を呈した10cm大の固まりとなっており、取り上げるともろくてくずれやすい。

（島田 恵子）

第4章 遺構と遺物

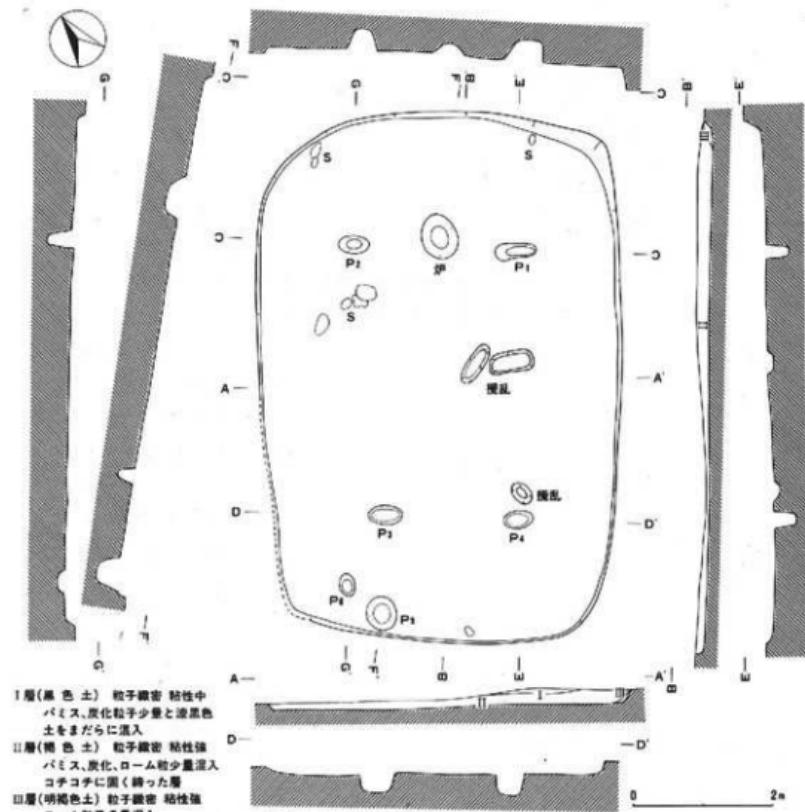
1 住居址

1) Y 1号住居址

遺構(第5図)

本住居址は、送電線鉄塔建設予定地の西南側に位置し、東南コーナーを溝址に接近した状態で検出された。

平面プランは、南北755cm、東西520cmを測り、隅丸長方形を呈する大形住居址である。壁高は、

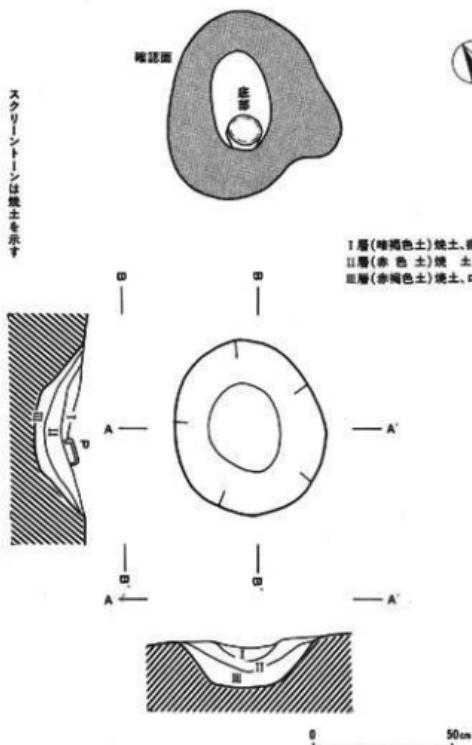


第5図 Y 1号住居址実測図 (1 : 80)

遺残状態が良かった北東コーナー付近では70cmを測り、壁は垂直気味に立ち上がる。その他東壁13~30cmを測り、南壁は7~13cm、北壁は6~25cm、擾乱、削平のひどかった西壁は0~11cmを測る。ここは、大正時代よりぶどう園として耕作されていたため、ぶどうの木の支柱、ぶどう棚の杭、鉄柱等を掘り込んでおり、特に擾乱されていた場所である。

主軸方位は、N-33'-Eを示す。

覆土は、強粘土層の3層によって形成される。Ⅰ層は淡黒色土をまだらに混入し、5mm大の炭化粒子、2mmの大バミスを少量含む。この層は、遺残状態の良かった北東コーナー側（I区）のみに残っていた。Ⅱ層は、コチコチに固い強粘土層で、バミス・炭化粒子を少量混入する。Ⅲ層は、明褐色を呈する逆三角堆土である。



第6図 Y1号住居址炉実測図 (1:20)

床面は、強粘土である地山を普段の生活で踏み固めたという状態で、張り床的状況は見られず平坦であった。

主柱穴は、P₁~P₄の4本が南北に360cm、東西180cmを測る長方形形の規則正しい配列を示していた。

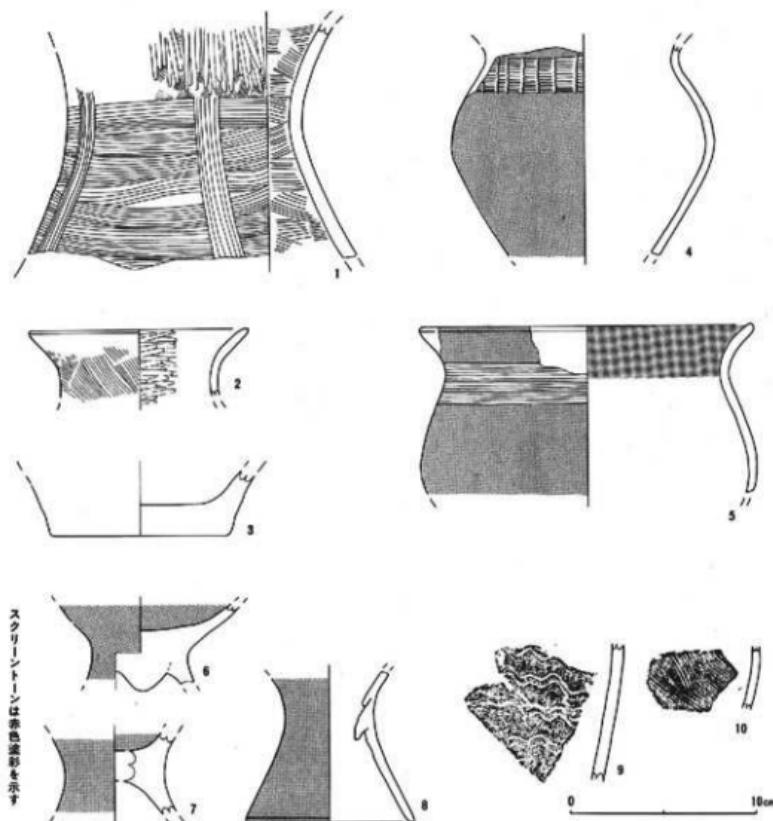
柱穴の掘り込みは、東西に長軸を持つ橢円形を呈している。

P₁は、58×20cm、深さ31cm、P₂は、43×26cm、深さ34cm、P₃は48×28cm、深さ28cm、P₄は、42×24cm、深さ32cmを測る。4本共にしっかりした柱穴で、柱はかなりの巨木を用いたと推測される。

また、住居址の南側壁下にはP₅があり、規模は44×48cm、深さ32cmを測る。底面から壺の胴下部破片(13×8cm大)が出土した。規模は小さいが何等かの用途によって築いたとおもわれる土壙状の穴である。P₆は、P₅の西側に隣接する穴で、23×32cm、深さ13cmを測る。規模から補助柱穴であるとお

もわれる。

炉は、P₁とP₂の中間に位置している。プラン確認時、第6図に示したように、床面東側に焼土がみ出した状態で散布し、南側縁には壺底部（第7図3）片が転がった状態で出土した。炉は、南北63cm、東西53cm、深さ22cmを測り、床面を17cm程掘り込んでいる。覆土は3層から成り、I層は焼土を微量含んだ暗褐色土で層厚7cmを測る。II層は、炉中央から床面の立ち上り際まで堆積している焼土である。2cm～6cmを測る厚さで焼土が充満している。III層は地山ローム層への焼け込みで焼土・ロームを混入する。



第7図 Y1号住居址出土土器実測図 (1:3)

P₁とP₄の間に3ヶ所の搅乱穴が生じているが、これはぶどうの木に施した支えの杭等により床面が破壊された痕跡である。

さらに、P₁に隣接した南側には、30×20cmを測る偏平な河原石、25×15cmの大三角形を呈した砂岩、第9図4に示した磨石状の石器も同様の場にあり、偏平な石は台石として使用したとおもわれ、この空間は作業をする場所であったと考えられる。
(島田 恵子)

(梶田 恵子)

遺物(第7~9図)

本址からは、土器と石器が出土している。土器は、従来出入口として考えられている南西壁付近にやや集中して出土する傾向にあり、器種には壺・甕・鉢・高杯がある。このうち図示し得たものは9点(実測図7点・拓影図2点)である。

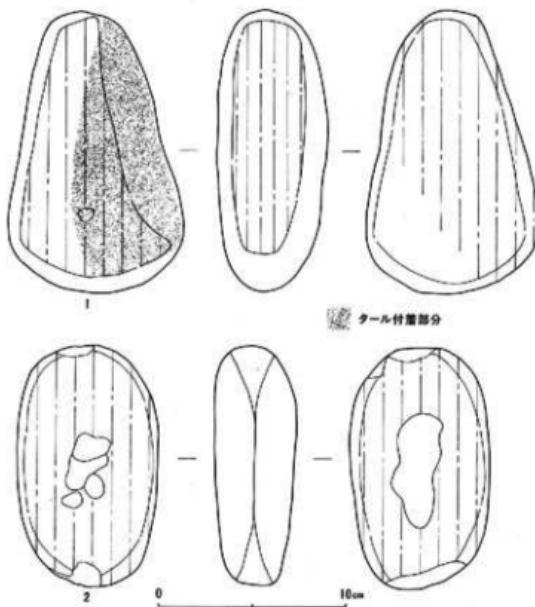
壇には7~11本、および5~7本一組の櫛描文による「T字文C」が施文された頸部資料(7-1)がある。

亮には、柳描文とするよりも刷毛目調整と考えられる口綴部から頸部にかけての資料（7-2）と胴部片（7-10）や、柳描波状文を施した胴部片（7-9）、磨滅のため調整・文様不明の底部資料（7-3）がある。

第4表 第1号住居址出土土器觀察表

法量は以下の順
口徑 { 検定値
容積 { 積存値
最大容積 單位は回

品番 番号	法量	器種	成形及び器形の特徴	調整・文様	備考
7-1	-	壺 (頸部)	口縁部は大きく外傾外反すると思われる。	外面は底位のハケメ調整→文様施文→底位のヘラナデ、内面は横位のハケメ調整が施されている。文様は頸部下位に位置し、7~11本一組の横拂横走平行線文を散歩巡らした後、5~7本一組の間接垂下文を一帯ずつ4ヶ所に施し「T字文C」を形成している。	
	<12.7>				
	-				
7-2	(11.8) <3.6> -	壺	口縁部は廻く外反する。	外面は斜位のハケメ調整、内面は横位のヘラナデが施される。	N=19
7-3	<3.5> -	壺		内面の底面にヘラナデが施される以外は磨滅が著しく調整不明。	N=23
7-4	<9.6>	鉢	最大径を胴部中位に持ち、底部に向て直線的に収束しつつある。	外面は底位のヘラミガヤと赤色彫影が施されている。内面は磨滅が著しく調査不明。 文様は頸部に13本一組の横拂垂下文状で間隔止めが右回りに一帯施されている。	N=18・21・28
7-5	(17.8) <8.8> (18.0) -	鉢	口縁部は廻く外反し、最大径を胴部や下方に持ち、広口で下ぶくれの感を受ける。	外面と内面底面以上には横位のヘラミガヤと赤色彫影が施され、以外は磨滅が著しく調査不明。 文様は頸部に15本一組の横拂横走平行線文が一帯施されている。	N=15
7-6	<4.7> -	高杯 (縦合型)	接合はソケット式によると考えられる。	外面は丁寧な底位のヘラミガヤと赤色彫影、内面は杯部に赤色彫影が施されている。	N=11
7-7	<4.3> -	高杯 (縦合型)		外面は丁寧な底位のヘラミガヤと赤色彫影、内面は杯部にナゲが施されている。	I区櫛土上部
7-8	<8.5> 9.2	高杯	接合はソケット式になっていたと考えられる。	外面は底位のヘラミガヤと赤色彫影が施されている。内面は磨滅が著しく調査不明。	N=13



第8図 Y1号住居址出土石器実測図No1 (1:3)

の杯部は大きく外傾しているのに対し、7-7は、余り外傾はしないと考えられ、あるいは脚付鉢になるかも知れない。7-8は外面赤色塗彩の脚部である。

この他、図示し得なかったものに、外面に赤色塗彩、内面に刷毛目調整を持つ壺の胴部片がある。以上、本住居址は「T字文C」を持つ壺の存在する事から考えて弥生時代後期も後半の所産として考えられよう。また、刷毛目調整された壺は、床面直上から出土しており、本址に伴うものとして考えられる。

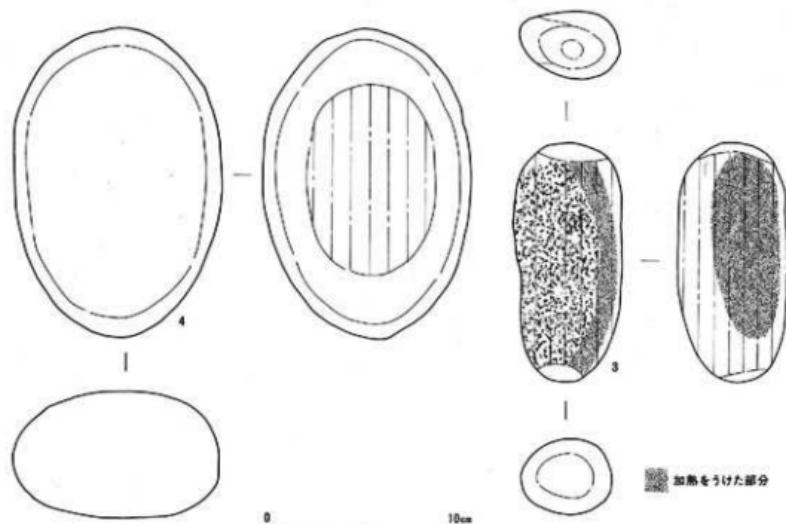
(榎原 浩江)

石器は、4点の出土があった。第8図No1は、長三角形の形状を呈した断面の厚い安山岩を素材としている。正・裏面共にあまり進んではいないが磨滑痕が認められる。それに比較すると左側断面は、使用的に進んだ磨滑痕がありこの面の使用が多かったと思われる。また、正面にはスクリントーン貼付の部分にタールがベッタリ付着している。裏面は薄くまだらな付着が認められる。北西コーナー壁下より出土。磨石として使用されたとおもわれる。

No2は、1区壁下の床面より出土した。正・裏面中央に使用の進んだ深い敲打痕があり、わずか

鉢としたものには、7-4・5がある。両者とも赤色塗彩が施され、頸部に櫛描による文様帯を持つが、7-4は簾状文等間隔止め(右回り)、7-5は横走平行線文を一遍させている。器形は全様を知り得ない乍らも、頸部のくびれ度合や、胴部の最大径の位置が多少異なり、7-4に比して7-5の方がすんぐりした下ぶくれの器形になりそうである。

高环には、7-6・7・8があり、6・7は内・外面ともに赤色塗彩が施される環部と脚部の接合部資料である。7-6



第9図 Y-1号住居址出土石器実測図No2 (1:3)

ながら磨滑痕も認められる。主に敲石として使用し、その際生じた擦り痕であるとおもわれる。長椭円形を呈した形の良い輝石安山岩を素材としている。

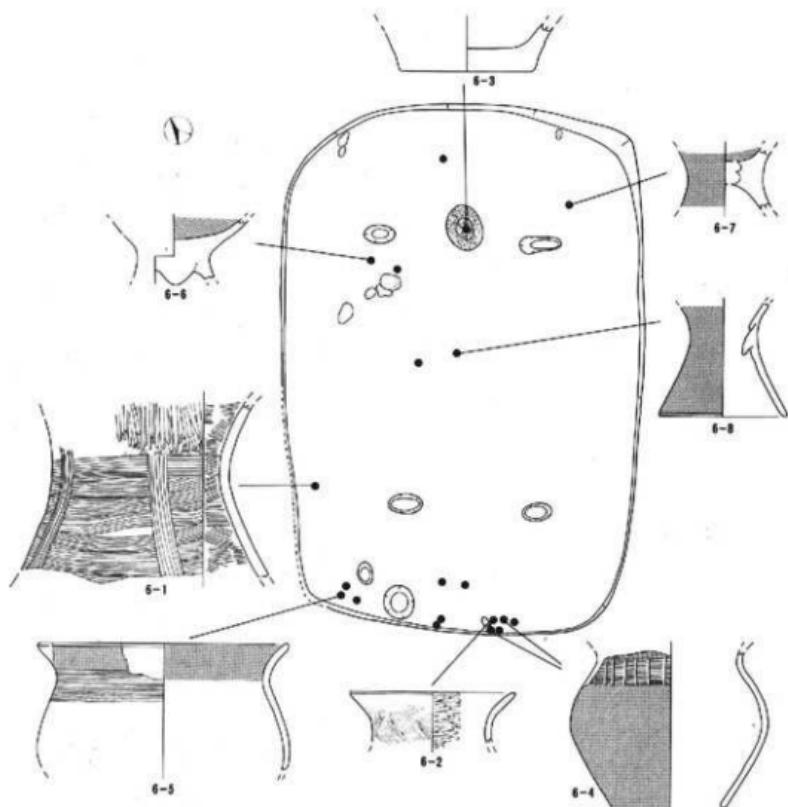
3は、両先端に敲打・磨滑痕が認められ、正・裏面は平均化した擦り痕が生じている。また、スクリントーンを貼付して示したが、正・裏面に加熱による赤色が認められ、さらに、正面には煤の付着であるとおもわれる黒色も見られる。北西コーナー壁下より、No1の磨石と並んで出土した。

4は、形の整ったやや大型の磨石兼敲石であるとおもわれる。磨滑はあまり進んでおらず、裏面の中央にのみやや認められる。輝石安山岩製で、P₁主柱穴の南側添いに出土した。この部分は台石と考えられる偏平な石、三角形を呈した砂岩などが並んでおり、作業の場であると考えられる。これ等の石は床面直上において連なるように並列し、当時のままの状態で住居内に残っていたと推察される。

(島田 恵子)

第3表 Y1号住居址出土石器一覧表

擲出番号	出 土 地 点	種 別	石 質	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	欠 損 状 態	備 考
8-1	北西壁下床面直上	磨 石	安 山 岩	15.0	9.3	6.0	1,100		タール付着
8-2	北東壁下床面直上	磨石・敲石	輝石安山岩	13.0	12.6	4.4	570		
8-3	"	"	"	11.8	6.1	3.7	520		煤付着 加熱で赤色
9-4	P ₂ 南側床面直上	磨 石	"	16.7	11.2	6.7	1,600	半分欠損	



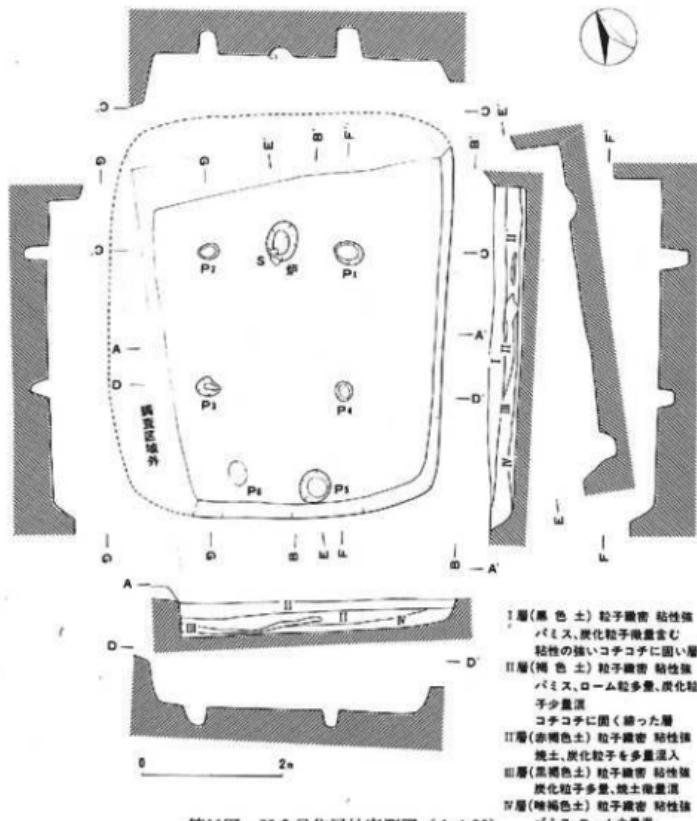
第10図 Y1号住居址土器出土状態図（住居址1:80、土器1:4）

2) Y 2号住居址

遺構(第11・12図)

本住居址は、鉄塔建設用地から4m外側に出た北西隅に位置している。本址は、Y 1号住居址プラン確認の折、バックホーで表土削平をしながら拡張していた際、住居址の東南コーナーが引っかかった為、中電の方のご厚意により工事のための借用地ギリギリまで掘ることが出来たが、住居址の北辺と西辺の一部を断念せざるを得なく、全体のはば4分の3を調査するにとどまった。

平面プランは、南北570cm、東西480cmを測ると推定され、隅丸方形のプランを呈す。壁高は、東壁31cm、南壁34~29cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上る。主軸方位はN-30°-Eを示す。



第11図 Y 2号住居址実測図 (1:80)

覆土は、4層によって形成される。全体に粒子緻密で粘性の強い固い土層で、I層は黒色を呈し炭化粒子を微量含む。II層は褐色を呈し炭化粒子の混入がI層に比べて多くなる。III層は炉の20cm上部に部分的に堆積している層で焼土・炭化粒子を多量含む。IV層は黒褐色土で、炭化粒子を多量、焼土を微量含み、I・II層に比較するとかなりやわらかい層を成している。V層は床面直上の暗褐色を呈した覆土で、バミス・ローム粒子を少量含む。

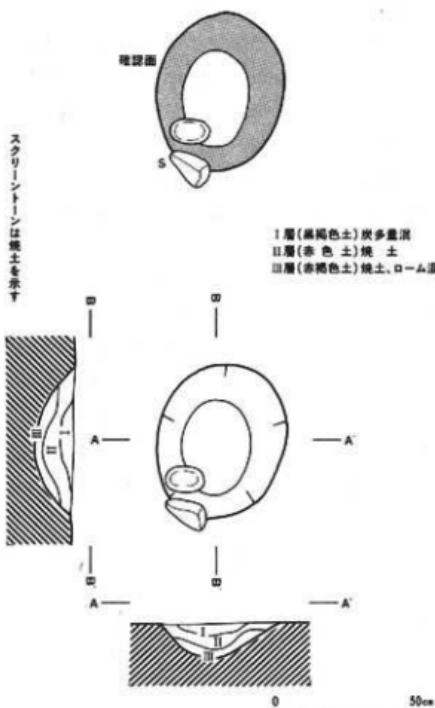
床は、V層をはぐとパンパンの貼り床状の固い床面があらわれ、Y1号住居址と様相を異にしていた。全体にまんべなく貼り床がなされて平坦である。

ピットは6個検出された。その内P₁～P₄が主柱穴で、ほぼ2m間隔の四角形に規則的な配列を示

している。P₁は、40×30cm、深さ38cm、P₂は、30×24cm、深さ32cm、P₃は、35×28cm、深さ27cmを測り、東西に長軸を持つ楕円形を呈す。P₄は、26×25cm、深さ23cmを測り、形状はほぼ円形を呈するが、柱穴の掘り込みは南北に長軸を持ち、P₁のみが異なる。また、掘り込み南側に柱痕状の黒色土がわずか認められた。

P₅は、南側壁下に設けられた、44×45cm、深さ22cmを測るピットで底面に土器片2点があった。小形ではあるが貯蔵穴であろうとおもわれる。P₆は、25×35cm、深さ19cmを測り補助柱穴であろう。底面より第16図2の磨石が出土した。

炉は、住居址北寄りのP₁とP₂の中間に検出された。南北54cm、東西45cmを測る南北にやや長い楕円形を呈している。最深部で深さ14cmを測り鉢形に掘り込まれた地床炉で、確認面での図に示してあるが、炉周囲は使用時にかき出されたと思われる焼土が周囲を巡っていた。また、南側の炉のふちには、



第12図 Y2号住居址炉実測図 (1:20)

12×8.5cm、15×8cmの大形の炉縁石2個が設置されていた。その内の1つは、第16図1に図示したが、形の整った磨石を転用している。炉の覆土は3層に分かれ、I層は黒褐色を呈し炭を多量に混入する。II層は焼土で、III層は地山ローム層への焼けこみである。

本住居址は、覆土II層中に焼土・炭化粒子が多量に認められ、III層全面にも多量の炭化粒子の混入があった。これは住居址廃絶の後になんらかの形で住居址が焼かれたものと推定される。

(三石 延雄・井出 正義)

遺物(第13~16図)

本址からは弥生土器の壺・甕・鉢・片口注口・高杯・ミニチュアが南東壁際に空白部を残し乍ら出土しており、そのうち図化できたのは壺2、甕27、鉢3、片口注口1、高杯3、ミニチュア2の計38個体であり、全て本址に伴うものと考えられる。

壺の第13図1は口縁部から頸部にかけての資料と、頸部以下の資料を、復元時に接合点は認められないものの、出土位置、器形、文様、胎土等を検討した上で同一個体の可能性が強いため図上復元を試みたものである。胴部はあまり張り出さないと考えられ、頸部下位から胴部上半にかけて文様帯を有し、櫛描横走平行線文が4帯巡らされるのみである。第15図1は、口縁部が内湾気味に立ち上がり、6本一組の櫛描波状文が施され、内外面に赤色塗彩が施されている。

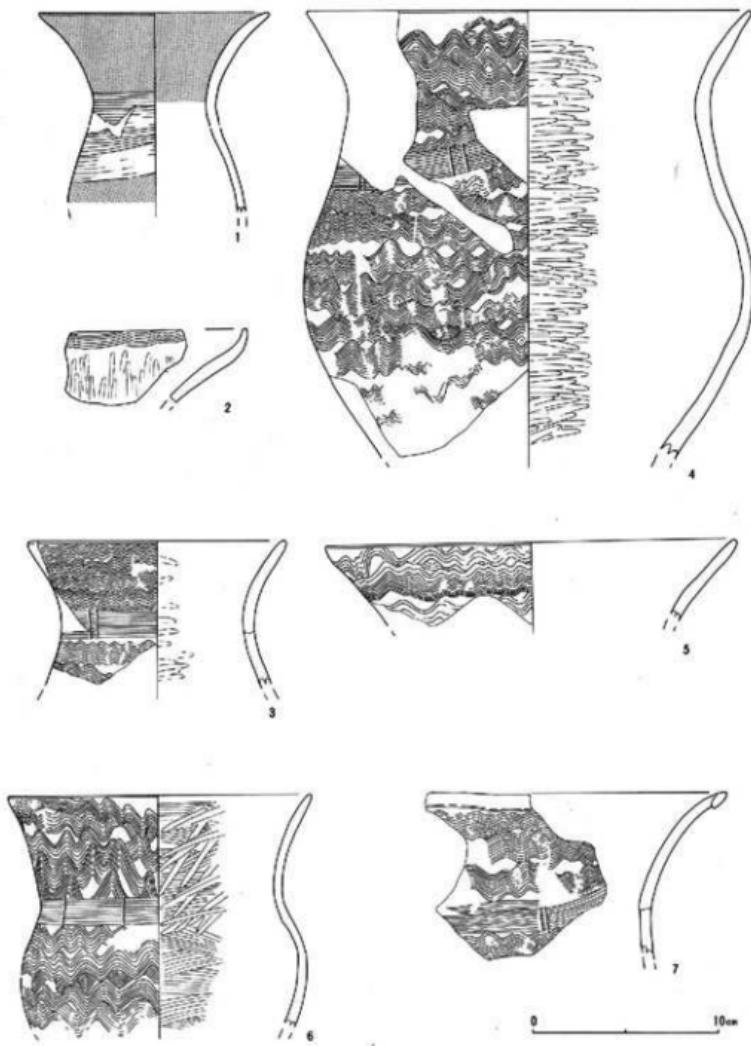
甕は第13図2~7・第14図1~21である。第13図2・第14図15は、口縁部が内湾気味に立ち上がり口縁部に6本一組の櫛描波状文が施されている。この二点は、調整技法も、櫛描文の本数も同様で、器形も酷似しているが、やや外傾の角度が異なる。第13図3~7は、櫛描波状文が上から下に施された後、頸部以下を欠損する第13図5を除くと全て頸部に櫛描縦状文が右回りに施されている。

第14図1~14は全て底部資料で壺の器形を呈する可能性もある。全器形は知り得ないが、小形を呈しそうなもの(14-6)、中形のもの(14-1~5・7~12)、大型のもの(14-13・14)に分けられる。第14図16・17は折り返しによる複合口縁を持つ口縁部資料である。第14図16には、10本一組の櫛描波状文が施されている。第14図18・21は厚手で櫛描横走平行線文を施した後、櫛描垂下文を施し「T字文C」を形成している頸部資料である。第14図20も「T字文C」が形成されるが前の2例に比して器肉が薄い。第14図19は、櫛描斜走直線文が横位羽状に施される胴部片である。

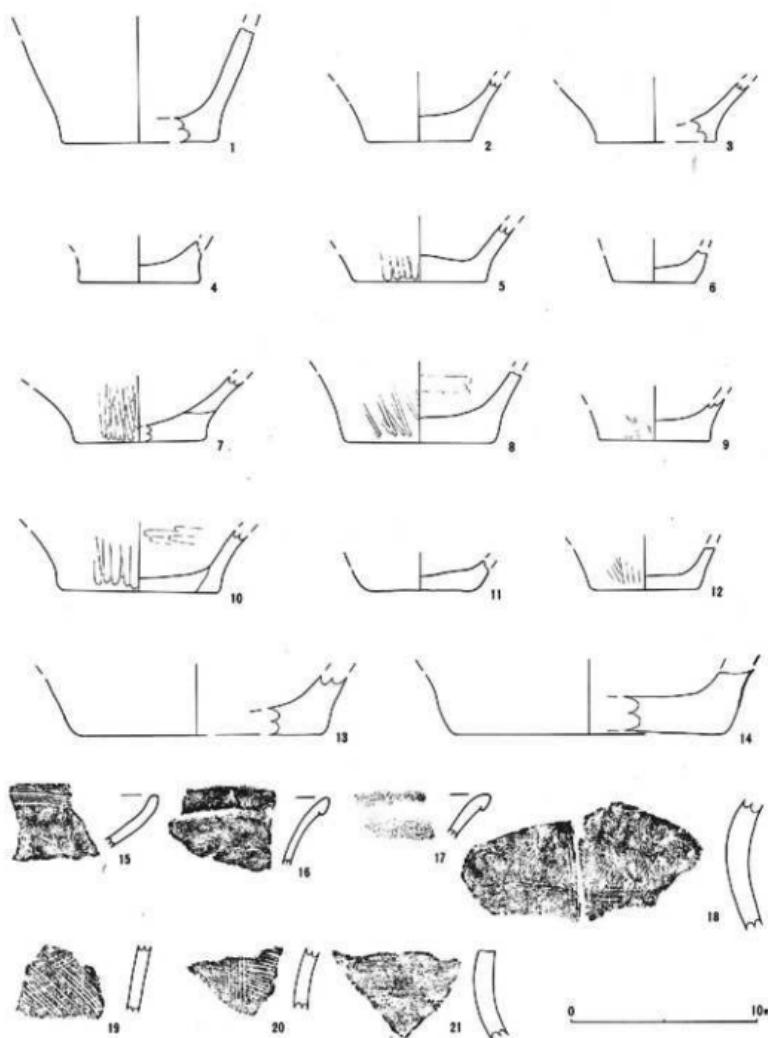
鉢は、第15図2~4で全て内外面とも赤色塗彩が施されている。第15図2は、完存するものであるが、口辺部内面に径約1cmの大穿孔途中の一孔を有し、内面底部の塗彩はアバタ状に剝離している。

片口注口土器としたものは第15図5で、厚手の注口部を有する口縁部片である。

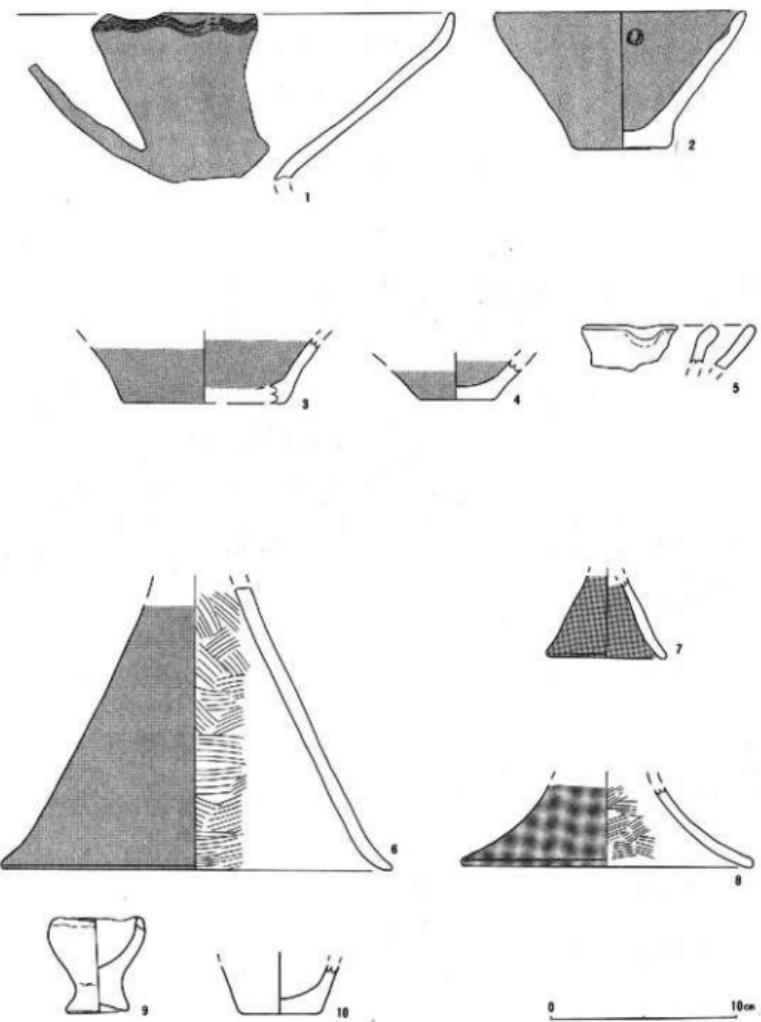
高杯は、第15図6~8で、全て脚部である。赤色塗彩は、内外面に施されるもの(15-7)と外面のみに施されるもの(15-6・8)が在る。器形にも大型のもの(15-6)から小型のもの(15-7)まで在り、逆「ハ」の字状に開くもの(15-6・7)と「弓」状に弧を描き乍ら開くもの(15-8)が在る。



第13図 Y2号住居址出土土器実測図 (1 : 3)



第14圖 Y2号住居址出土土器実測図No 2 (1 : 3)



第15図 Y2号住居址出土土器実測図No3 (1:3、9・10のみ1:2)

第4表 第2号住居址出土土器観察表

種類 番号	法量	器種	成形及び器形の特徴	調整・文様	備考
13-1	(12.4) — — —	壺	口縁部は細い、頸部から「弓」状に外傾外反し、肩部はあまり張り出さない。	外面は口辺部にヨコナデ、以下は瓶底のヘラナデが施され、全面に赤色塗彩されており、内面は横位のヘラナデが施され、頸部以上に赤色塗彩されている。以下は磨滅のため不明。 文様は頸部から肩部上半にかけて、7~14本一组の櫛描波状平行線文が4帯施されている。	炉の上 区復元による。
13-2	(14.8) <3.8> —	壺	口縁部は内凹気味に立ち上がる。	外面は瓶底のヘラナデ、内面はヨコナデが施されている。 文様は口縁部に6本一组の折幅の小さな櫛描波状文が施されている。	No.10
13-3	(13.9) <7.7> —	壺	口縁部は、あまりくびれない、頸部から「弓」状に外傾外反する。	内面は磨滅が著しいが、頸部のヘラナデが施されている。 文様は11本一组の櫛幅が小さく、整った櫛描波状文が上から下へ施された後、頸部に11本一组の櫛描波状文2連止めが右回りに施されている。	Ⅲ区復土上層 炉の上
13-4	23.8 <24.0> 24.0 —	壺	口縁部は、あまりくびれない、頸部から直線的に屈く外傾する。最大径は肩部中央に位置し、口径とはほぼ等しい。	内面は丁寧な瓶底のヘラナデが施されている。 文様は口縁部から肩部下位に12本一组の櫛描波状文が上から下へ右回りに施された後、瓶底下位に12本一组の櫛描波状文2連止めが右回りに施されている。	No.88
13-5	(22.0) <4.4> —	壺	口縁部は、直線的に外傾している。	内面調査は磨滅が著しく不明。 文様は11本一组の難な櫛描波状文が施されている。	Ⅰ区復土下層
13-6	(16.2) <12.3> (15.4) —	壺	口縁部は、あまりくびれない、頸部から直線的に長く外傾する。	内面は斜位のハケメ調整の後、頸部以上に斜位の粗いヘラナデが施されている。 文様は7~8本一组の櫛描波状文が上から下へ施された後、頸部に櫛描波状文2連止めが右回りに施されている。波状文は頸部以上のものが振幅が大きく、難である。	Ⅳ区復土下層
13-7	(24.0) <9.0> —	壺	口縁部は「弓」状に外傾外反し、端部で折り返しによる複合口縁を呈する。	外面の口唇部と内面は横位のヘラナデが施されている。 文様は11本一组の櫛描波状文が施された後、頸部に9本一组の櫛描波状文2連止めが右回りに施されている。	Ⅰ区復土下層
14-1	— <5.5> (8.0)	壺	やや内凹気味に立ち上がる。	内・外とも磨滅が著しく調整不明。	Ⅱ区復土下層
14-2	<3.0> — 5.6	壺	外反気味に立ち上がる。	内・外とも磨滅が著しく調整不明。	No.81
14-3	— <3.0> (6.4)	壺	やや内凹気味に大きく外傾する。	内・外とも磨滅が著しく調整不明。	No.38
14-4	<2.2> — 6.4	壺		外面は磨滅が著しく調整不明。内面はヘラナデが施されている。	No.93
14-5	<3.1> — 7.0	壺	直線的に外傾する。	外面は瓶底のヘラナデが施され、内面は磨滅が著しく調整不明。	
14-6	<1.4> — 4.2	壺		外面は磨滅が著しく調整不明。内面はヘラナデが施されている。	No.66
14-7	— <3.0> (6.8)	壺 (壺)	粘土板貼り付けにより成形しており、大きく外傾する。	外面は丁寧な瓶底のヘラナデが施され、内面は磨滅が著しく調整不明。	Ⅲ区復土下層
14-8	<3.8> — (8.0)	壺		外面は細い単位の瓶底のヘラナデ、内面は横位のヘラナデが施されている。	Ⅱ区復土下層

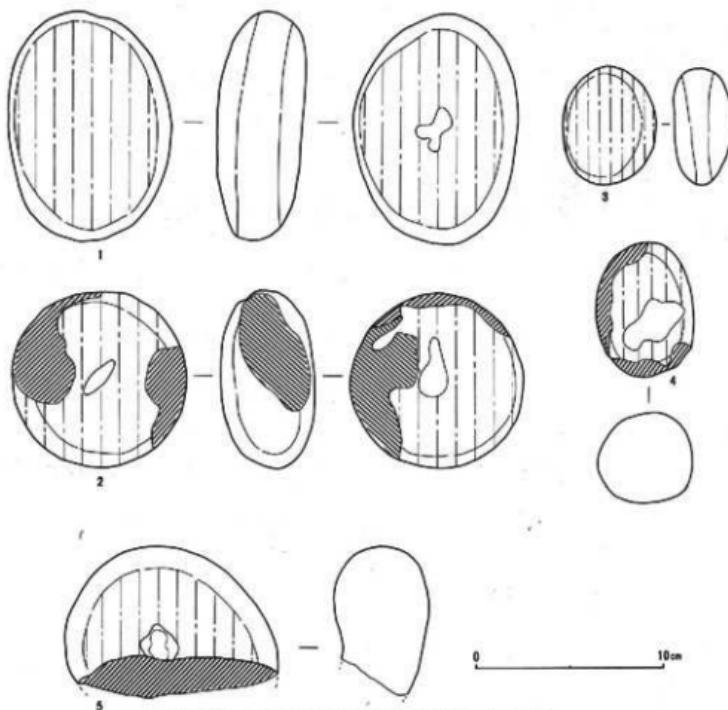
住居社の区分は I 区（北東コーナー側）、II 区（北西コーナー側）、III 区（南西コーナー側）、IV 区（南東コーナー側）

種別番号	法量	器種	形成及び器形の特徴	調整・文様	備考
14-9	- <2.3> - 6.8	甕		外面は粗いハケメ調整が施され、内面は磨滅が著しく調整不明。	II区覆土下層 外面に瓦の付着が著しい。
14-10	- <3.4> - (8.4)	甕	粘土板の周囲に粘土縁を巻きつける様にして成形しており、大きく外傾する。	外面は横位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデが施されている。	No.42
14-11	- <1.1> - (5.6)	甕		内・外面ともに磨滅が著しく調整不明。	No.30
14-12	- <2.2> - (6.8)	甕	直線的に外傾する。	外面は粗いハケメ調整、内面はヘラナデが施されている。	No.8
14-13	- <3.1> - (13.4)	甕	大形で厚手である。	内・外面ともに磨滅が著しく調整不明。	No.40
14-14	- <3.2> - (14.4)	甕	大形で厚手である。	内・外面ともに磨滅が著しく調整不明。	No.85
15-1	(18.4) <10.0> -	甕	口部は内向気味に立ち上がる。	外面は口辺部に横位のヘラミガヤ、以下は縱位のヘラミガヤと文様施文・赤色塗彩の頸に施される。内面は横位のヘラミガヤと赤色塗彩が施される。文様は、口辺部に 6 本一組の柳葉状文が施されている。	No.83 II区覆土下層
15-2	13.5 7.4 - 5.2	鉢	底部からやや内向気味に立ち上がり輪状を呈する。口辺部内面に穿孔途中の一孔を有する。	内外面ともに丁寧なヘラミガヤと赤色塗彩が施されている。	
15-3	- <3.1> - (8.6)	鉢	やや外向気味に外傾する。	内外面とも縱位のヘラナデと赤色塗彩が施されている。	覆土下層
15-4	- <1.6> - (4.0)	鉢		外面は縱位のヘラミガヤと赤色塗彩、内面はヘラミガヤと赤色塗彩が施されている。	No.95
15-5	(8.2) <2.4> - -	片口	口辺部は直線的に外傾し、先端部につままれる様に外送する部分を有する。	内外面ともに磨滅が著しく調整不明。	II区覆土
15-6	- <15.0> - (21.0)	高杯	「ハ」の字状に開き、縁部で僅かに外返する。	外面は、縁部に横位のヘラミガヤ、以上は縱位のヘラミガヤと全面に赤色塗彩が施されている。内面は横位および斜位のハケメ調整が施されている。	
15-7	- <5.3> - (6.4)	高杯	「ハ」の字状に開き、中程でややふくらむ。	外面は縦位のヘラミガヤと赤色塗彩、内面は、横位のハケメ調整と赤色塗彩が施されている。	No.31
15-8	- <4.2> - (15.6)	高杯	やや「弓」状に外向しながら開き縁部に僅かな腹を有する。	外面は、縁部に横位のヘラミガヤ、以上は縦位のヘラミガヤと全面に赤色塗彩、内面は横位のハケメ調整が施される。	No.9
15-9	3.2 3.4 - 2.4	（ 片口 ニチ ？ テ ）	輪横みにより成形し、手捏ね整形をしている。		No.82
15-10	- <1.3> - 2.8	（ 甕 ニチ ？ テ ）	手捏ね整形による。		No.94

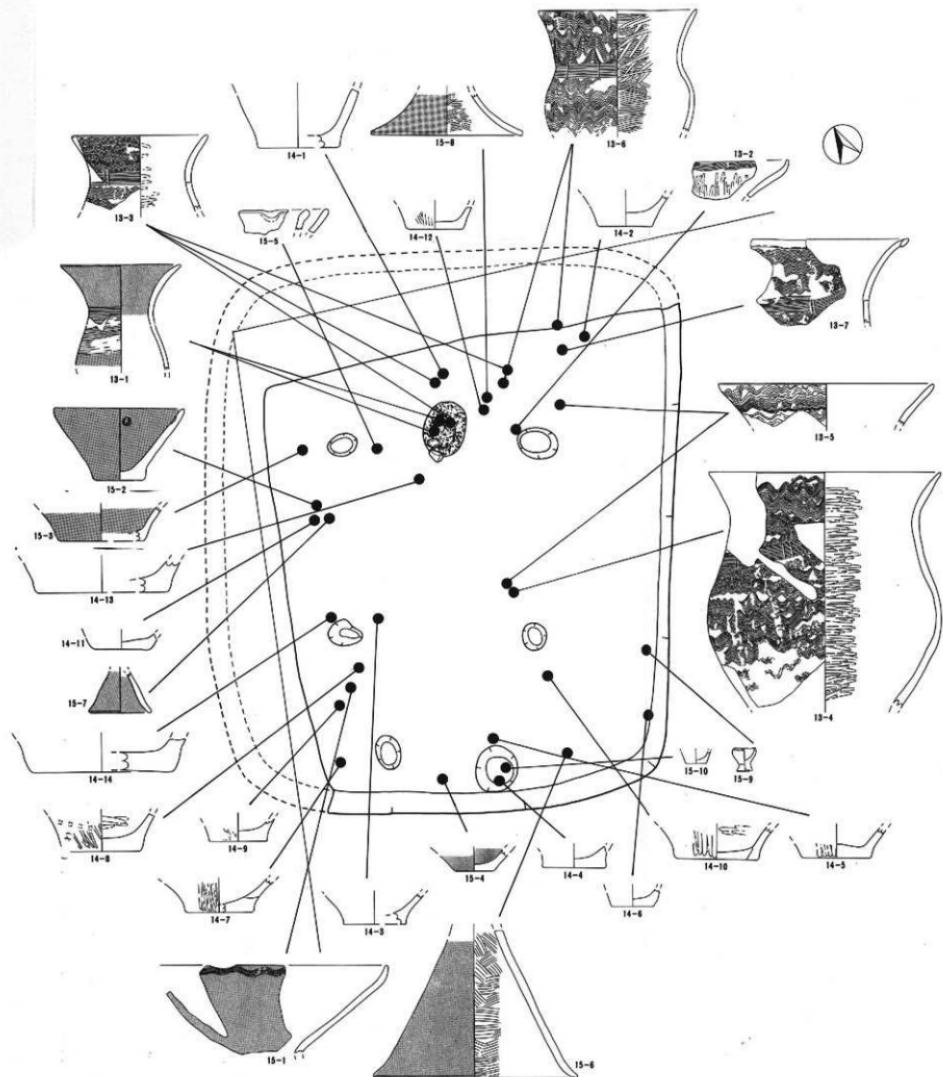
ミニチュア土器は、第15図9・10で、15-9は高环様の器形を呈するが、脚付鉢を模した可能性もある。15-10は、底部のみで全器形は判定できなかった。これら両者は共に、塗彩の施された痕跡は認められず、手捏ね成形によるものである。

以上、箋描文が一点も認められず、櫛描文が多様されている事、大形の高环が存在する事、「T字文C」が施された頸部破片が存在する事などを考え合わせると、本址の所産期は弥生時代後期後半に求められ、Y1号住居址の所産期と大差ないと考えられる。
(樺原 浩江)

石器は、5点出土した。第16図1は、炉のふちに埋めこまれていた石で、第12図炉実測図に示したように、2個の炉縁石が存在しており、その一つは三角形を呈した普通の河原石（安山岩）であるが、1は形の整った磨石を転用したものであると考えられる。手の中に握れる手頃な大きさで、正・裏面共に磨滑されている。特に裏面は浅い敲打痕が認められ、磨石兼敲石としても使用されて



第16図 Y2号住居址出土石器実測図 (1:3)



第17图 Y2号住居址出土土器出状整圆(住居址1:80 土器1:4)

第5表 Y2号住居址出土石器一覧表 < >現存値

擇回番号	出 土 地 点	種 別	石 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠 損 状 態	備 考
16-1	炉壁	磨石・敲石	輝石安山岩	12.2	8.8	4.6	730		炉壁に使用
16-2	P内	磨 石	花崗 岩	9.4	9.3	5.1	600	表面ひび割れ	
16-3	Ⅲ区覆土下	"	安 山 岩	6.3	5.0	3.1	100		
16-4	南西コーナー付近	"	"	7.2	5.1	4.8	280	ひび割れ	
16-5	北東 "	磨石・敲石	輝石安山岩	<8.0>	11.3	5.0	520	3分の1欠損	

いる。正面と比較して裏面の使用はかなり進んでいる。

2は、花崗岩を形の良い円形に整えた磨石である。原石の性質からもかなり進んだ磨滑痕が顕著であるが剥落もはげしい。正・裏面中心部に浅い敲打痕が認められるが、主に磨石として使用されている。P内から出土。

3は、偏平に近い椭円形を呈した安山岩の小礫である。正・裏面共に磨滑痕が顕著で磨石として使用したものであるとおもわれる。南西コーナー付近より出土。

4は、大形の卵に似た形状を呈している。よく磨滑されているが剥落がはげしい。磨石として使用した様相を呈している。輝石安山岩を素材とし、3と同様南西コーナーの床面直上に出土した。

5は、下端を欠損した磨石兼敲石である。正・裏共に磨滑痕があり、正面にのみ敲打痕が認められる。輝石安山岩製で東北コーナー付近の壁下床面直上において出土した。

(島田 恵子)

2 溝状遺構

1) M1号溝状遺構(第18図)

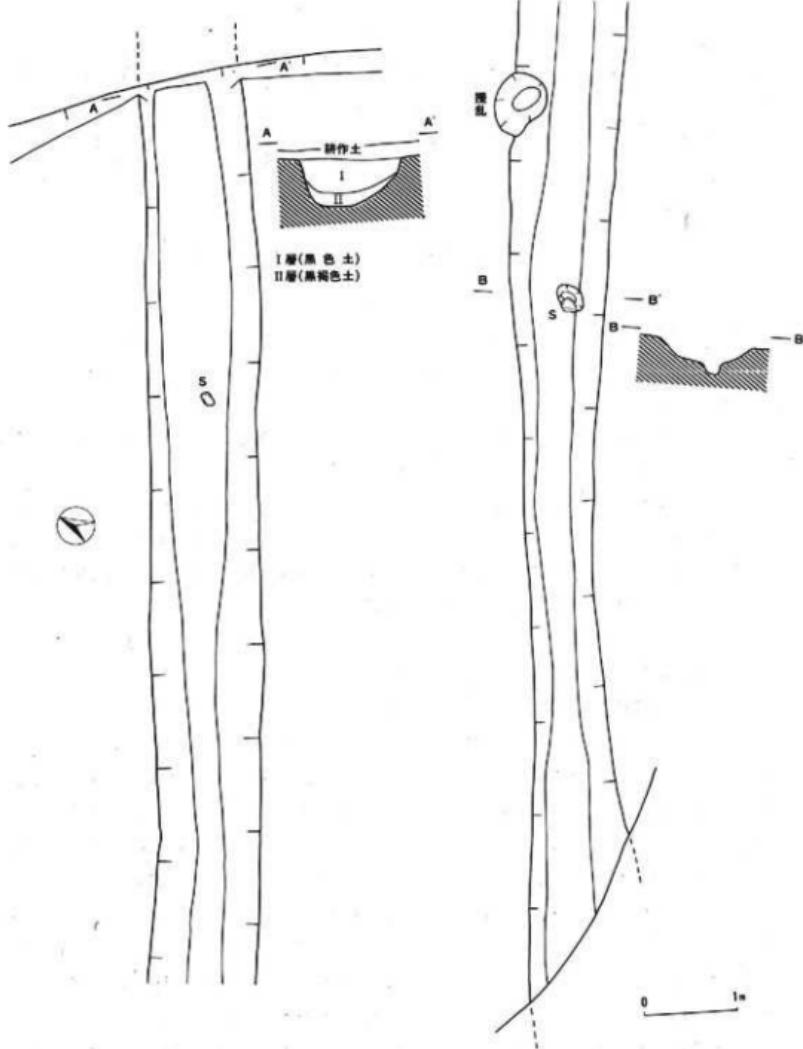
溝は、鉄塔建設の予定地内に北東方向から南西方向に直線的に延びた状態で検出された。検出面のみの平面プランは、幅110cm~70cm、深さは北東端が35cm、南西端が10cmを測る。長さは20mであったが、北東側10m先の畑に試掘トレンチを入れたところ、先へ続いていることが判明した。

覆土は、黒色土を基調とした2層によって形成される。I・II層共に強粘土層で固く、パミス、炭化粒子を微量混入する。底面付近には砂礫層は全く見られず、水が流れた形跡はない。

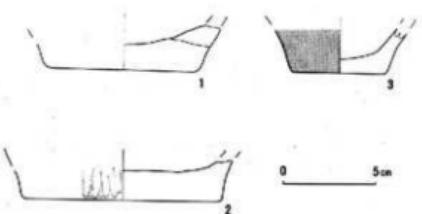
底面の幅は、広かったり、急にせばまつたりと一定の規格はみられないが、最大幅75cm、最小幅25cmを測る。壁は、削平擾乱されていない北東端側が急傾斜をもって立ち上るが、ぶどう園によつて擾乱されている南西側に至るにしたがって、なだらかに立ち上る。底面に見られるP₁は、26×30cm、深さ12cmを測り、立ち上り際に酸化して赤色化した15cm大の礫があった。

本址からは、図示した3点の土器が出土している。第19図1・2は甌の底部と考えられ、厚手で大形である。19-3は壺の底部で、外面に縦位のヘラミガキと赤色塗彩が施されている。

これらの遺物は弥生土器である事は明白であるが、いずれも底部資料のみであるため詳細は不明



第18図 M1号溝状遺構実測図 (1:60)



第19図 M1号溝状遺構出土土器実測図（1：3）

である。しかし、Y1号・Y2号住居址とともに弥生時代後期後半箱清水式期の単一時期に限定され、弥生時代の他の時期と遺物が重なり合わないことからも、同一の時期に構築された構であると考えられる。

(島田 恵子・猿原 浩江)

第6表 M1号溝状遺構出土土器観察表

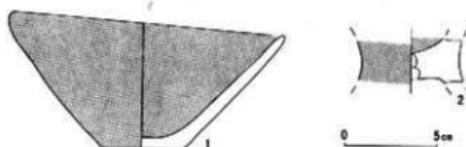
抽選番号	法量	器種	成形及び器形の特徴	調査・文様	備考
19-1 — 7.8	<2.4> — 7.8	甕	粘土接合部が観察できる。	内外面ともに磨滅が著しく調整不明。	No.3
19-2 — 10.6	<2.2> — 10.6	甕		外面は縦位のヘラナデが施される。内面は磨滅が著しく調整不明。	腹土
19-3 — (5.0)	<2.4> — (5.0)	甕		外面は磨滅が著しく調整不明だが、赤色塗彩が施された痕跡が認められる。内面は磨滅が著しく調整不明。	

3 参考資料（第20図）

今回の調査で出土した資料以外のもので、本址付近から出土したもの参考資料として2点の土器を図示した。（第20図1・2）

第20図1は、町内の高見沢清美氏所有で、今回の調査区から約200m離れた地点より出土したものである。昭和51年頃、高見沢氏が住宅を建設した際、多量の土器片と共にこの完形品を発見し大切に保存してきたとのことであり、今回文化センターへ寄贈いただいた。改めてお礼申し上げたい。

口辺部がやや内弯し、碗状を呈する鉢形土器である。内面は横位の、外面は縦位の丁寧なヘラミガキが施され、内外面ともに赤色塗彩が施されており、本址第2号住居址から出土した鉢（第15図2）と類似している。



第20図 参考資料（1：3）

第20図2は、中部電力株式会社が本調査区より20m離れた場所で支柱用の穴を掘っていた際に出土したもので、高杯か脚付鉢の脚部接合部である。脚部内面を除く全面に赤色塗彩が施され、外面には丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。

第7表 参考資料土器観察表

器団番号	法量	器種	成形及び器形の特徴	調整・文様	備考
20-1	14.7 6.7 — 4.4	鉢	逆「へ」の字状に開き、口辺部でやや内凹気味を帯び、桶状を呈する。	外面は丁寧な模位のヘラミガキと赤色塗彩、内面は丁寧な模位のヘラミガキと赤色塗彩が施されている。	高見沢清美氏所 有。内外面の底 部は塗彩の剥落 が著しく、ゴツ ゴツしている。
20-2	<2.1> — —	高 杯 立		外面は丁寧な模位のヘラミガキと赤色塗彩、内面は脚部を除いて赤色塗彩が施されている。	中部電力線の支 柱工事の出土

20-1 の鉢形土器は、弥生時代後期所産のものに類似が多いが、編年を追える程の器形変化は観られず、また20-2 の資料も全器形を推定するに困難な部分資料であり、従っていずれの土器をも、編年内に比定し得ることは困難である。しかし今回の発掘調査に於ける出土遺物が、弥生時代後期の所産として考えることが出来、強いては、勝間原集落が広域におよぶ事が推測できる。

(藤原 浩江)

第5章 まとめ

第1節 遺構

勝間原遺跡は、縄文時代後期・弥生・古墳・平安時代まで人々が生活を営んでいた遺跡である。それは周辺の烟から表面採集される土器片・石器等によって知ることができる。

今回発掘調査された区域は遺跡内のはんの一部であり、千曲川の左岸比高約15mの段丘縁辺部に位置している。調査によって検出された遺構は、弥生時代後半（箱清水式期）のY1号・Y2号住居址・M1号溝状遺構等である。

第8表 勝間原遺跡検出住居址一覧表 () 推測値

遺構	平面プラン				主軸方位	主柱穴	時期	備考
	形態	東西	南北	壁高				
Y1号	隅丸長方形	520 cm	755 cm	6~70 cm	N-33°-E	4	弥生時代 後期後半	南西壁一部破壊 地床炉・貯蔵穴1
Y2号	隅丸方形	(480)	(570)	29~34	N-30°-E	4	"	地床炉・貯蔵穴1 4分の3の調査

上記の第8表に記してあるが、Y1号住居址・Y2号住居址は、主軸方位N-33°-E・N-30°-E（北より約30°東側へ寄る）を示し、ほぼ同一の方位に向けて建てられた住居址である。

住居址の規模は、Y1号住居址が755cm×520cmを測り、南北に長軸をもつ大形住居址である。深さは、遺残の良好であった北東壁コーナーで70cmを測る。埋土は自然堆積の状態を示していたが、西壁～南壁にかけてはぶどう園としての耕作による搅乱により、ようやく輪郭をとどめている状態であった。

Y2号住居址は全容を調査するには至らず4分の3の検出にとどまるを得なく、従って住居址の規模は推定値である。南北570cm、東西480cmを測り中形の住居址となろう。深さは30cm前後を測り、埋土は自然堆積である状態を示していたが、Ⅲ層中に炭化粒子・焼土を含み、Ⅱ'層に至っては炭化粒子・焼土を多量混入した埋土で、廃絶して間もなく火災に遭った様相を呈していた。

住居内の様相は、Y1号・Y2号住居址ともに同一の規格性を持って構築されており、同時期の住居址であることが理解できる。4本の規則的配列を呈した主柱穴、北側の主柱穴と主柱穴の真中につくられた地床炉、南壁下に設けられた小形の貯蔵穴、また、貯蔵穴付近に設けられた補助柱穴的なピット、遺物の散布状態等に同一性を見ることが出来る。

Y1号住居址の主柱穴は住居址中央に4本、南北360cm、東西180cmを測る長方形の間隔を持って規則的な配列を示し、東西に長軸を持つ梢円形に掘り込まれている。柱は大形住居址に耐え得るようなかなりの巨木を用いたことが、深さと掘り込みの規模から推定される。

Y 2号住居址の主柱穴は、住居の規模が中形となるためやや小さくなる。柱穴の配列も住居址中央に約2mを測る四角形を呈した間隔を持って配列している。

また、南壁下に設けられたP₃は、両住居址ともに44cm×45・48cmを測る同一規模のピットで底面より土器の出土があった。周囲からも土器が集中して出土していることから貯蔵穴であろうと考えられる。

炉は、Y 1号・Y 2号住居址ともに、北側主柱穴の真中に床面を10~17cm程度掘り込んだだけの簡単な地床炉である。規模はY 1号住居址が63cm×53cm、Y 2号住居址は54cm×45cmを測りほぼ同規模である。Y 1号住居址の炉の上部に甕底部片が伏せてあり、Y 2号住居址の炉は、2個の石が炉縁石として埋め込まれていた。

床面は、Y 1号住居址が踏みしめた状態であり、Y 2号住居址はたたき締めたかのようにパンパンの固い床であった。両住居址ともに床面は平坦な状態を呈していた。

第2節の遺物の部でも後述するが、Y 1号・Y 2号住居址共に遺物の出土地点が周辺から西壁・南壁側に集中し、東壁側部分が空白地区となる傾向が見られる。従来より考えられていた南側の出入口部には、貯蔵穴が存在しその周辺に遺物の出土（床面直上）が多く、出入口部としては煩雑であると考えられる。両住居址が同一の状態であることも注目される。従って出入口は東側に設けられていた可能性もあり得るが判然としない。

南佐久郡下において弥生時代の住居址検出は本遺跡が初見である。従って他遺跡との比較検討はできないので、佐久市の最近の調査例を見てみたい。

昭和61年、佐久埋蔵文化財調査センターで調査した、佐久市安原に所在する池畑遺跡、第1号住居址の内部の様相は、本遺跡の住居址と全く同一である。ただ時期が本遺跡よりやや新しく弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられている。規模は、本遺跡Y 2号住居址とはほぼ同じである。これほど酷似した住居址はめずらしい。

また、昭和55年、佐久市教育委員会が調査した、岩村田下小平に所在する下小平遺跡Y 3号住居址もほぼ同様の内部施設を有している。規模はやはり本遺跡のY 2号住居址と同様である。

本遺跡の集落（弥生時代後期後半）は、第20図で図示した既出土器により200m先まで広がっていることは明白であり、弥生時代單一時期の集落址である可能性も伺える。従ってM 1号溝状遺構も本集落に関わる遺構であると考えられる。また、本遺跡は千曲川水系箱清水文化圏の南端および最上流域に立地する集落址である。これより南の地区にはこれだけの広い規模を持つ集落址は見られないことから、本遺跡の調査は弥生時代後期後半における箱清水文化圏の南限集落址として貴重な資料となろう。

（島田 恵子）

第2節 遺物

1) 土器

本遺跡出土土器のうち図示し得たものは総数52点（拓本8点）であり、完存品あるいはそれに近いものは極めて少ない。これは覆土、地山ともに強粘土層という遺跡の性格に起因しており、遺物の磨滅が著しく復元作業に困難を強いられたことが影響していると言えよう。

この様に全容を識り得ない資料を分類する事は危険であるが、資料を整理する意味で次のように大まかに分類してみた。（第21図）



これらの土器を“生活の器”として観た場合、赤色塗彩される土器の多い事に気付く。赤色塗彩は一般に祭祀色と考えられ、祭器としてとらわれ易いが、その占める割合を考えると一概に祭器とは言い難い。例えば、大きさで3分類した高杯であるが、自分よりも高い処へ物を奉げるための脚を有する器形や、赤色塗彩される事から、高杯を一口に祭器としている向きが見られる。しかし、一軒の住居址から大きさの異なる高杯が出土している場合、大形高杯の割合が少い例が比較的多く見られたり、本遺跡第2号住居址のように、非日常品として考えるに易しいミニチュア手捏ね土器と近接した位置から出土している事などを考え合わせると、數品目の食物を盛合わせて神に奉げる器として大形高杯が用いられていたのかも知れない。一方中形・小形のものは炉に比較的近い空間から出土している事より、日常品とも考えられる。もっとも確然とした分析もしていないので、高盤など奉げる器が小形・中形高杯から変化すると云う土師器の形態変化からは外れてしまう。その点は今後更に検討していく必要があるわけだが、要は赤色塗彩されていると言うことだけで祭器

に結びつけてはいけないのではないかと言うことである。これは高杯に限らず、明らかに器形の異なる2分類した鉢に関しても同様である。これら生活の器の出土位置の傾向を観ると、Y1号、Y2号住居址共に、南東壁際に空白部分を残しており、一方、炉と対応する入口部であろうと考えられている南西壁際には空白部分は有さず、床面直上より遺物が出土している。この南東壁際は、寝所、あるいは案外と出入口スペースだったのかも知れない。またY2号住居址出土のミニチュア土器は前に述べた大形高杯脚部と共に南西コーナーより出土しており、祭祀に関する空間としても想定出来得ることを指摘しておきたい。

次に“時間の器”として土器を観ておきたい。

本遺跡出土の土器は、ほぼ同一時間帯の所産と考えられ、特に卓越した時期のものは見当たらなかった。これらの土器中には箋描文が一片も存在せず、櫛描文だけで施文されている事。櫛描文も、波状文・簾状文・横走平行線文を主体に、斜走直線文が僅か一片認められ、絞杉文・鋸歯文の施されたものが一片も出土していない事、「T字文C」を持つ壺が在る事より考えてその所産期は弥生時代後期後半の箱清水式期に求めることができる。ここで問題になる事は、1) 折り返しによる複合口縁の壺の存在について 2) 外領内窓気味の口縁部に波状文が施される壺の存在について 3) 印毛目調整を施す壺の存在について これら3点を挙げることができる。以下、各々について簡単に触れたい。

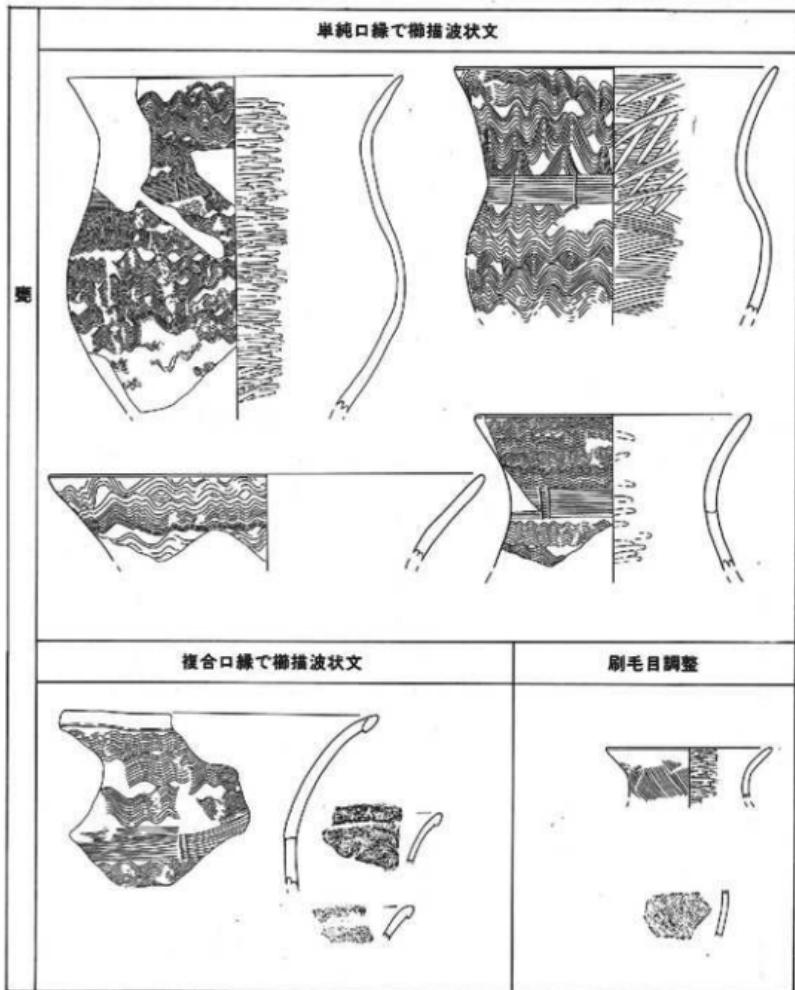
1) 複合口縁の壺は、佐久地方で一本柳遺跡・清水田・下小平・池畠遺跡にみられる。大方折り返しによるものであるが、池畠遺跡のように貼付による例も在る。古い様相としてとらえられてきた折り返し口縁であるが、橋本裕行氏は「詳細に検討してみると、かならずしも確実な様相とは見えず、依然として疑問が残る。¹⁰⁾」と早くに指摘している。確かに下小平遺跡の小形高杯とした資料の中に、脚部に円形穿穴を有し、弥生末期から観られる器形に近似したものが存在することや、池畠遺跡例などを考えると安易に古い様相と決めつけられないようである。

2) 内窓する壺の口縁部に櫛描波状文を施す佐久地方の例は、一本柳・下小平・後沢遺跡に見受けられる。これらの中には、しっかりした複合口縁を呈するものと、やや内窓気味に立ち上がるものとが在り、本遺跡は後者例にあたる。口縁部に立ち上がりの見られる壺に関して、時間差とする見方と地域差とする見方が在るが、出土遺跡を見ると、折り返し口縁の壺の出土遺跡とクロスする向きがやや見受けられ、ここに地域的な何らかの作用を感じる。

3) 刷毛目調整の施された壺は、弥生土器からの脱却様相として外来する台付壺に見られる特徴である。本遺跡からは、僅かに2点出土するのみで、部分資料であるが、床面に接して出土しており、櫛描文と赤色塗彩で華々しく飾られた土器と共に伴する事が言える。

以上、本遺跡の営まれた時期は、箱清水式期に於いても、その文様・色彩の如く華々しく栄え乍らも、弥生土器から土師器への混屯とした交代期を迎える、静かなるプロローグを密めている様相

第21図 勝間原遺跡出土土器型態分類図



	口縁部外傾外反	口縁部外傾内弯	
壺			
	注口を持つ 無頸壺 or 針		
	口縁部短かく外反		
鉢			
	口縁部くびれず椀状		
	大形	中形	小形
高 坏			

が窮えるのではないだろうか。

(権原 浩江)

注

- 1) 星 龍象他 1975 「信濃の弥生式土器から土師器への変遷過程(一)」『史館』第5号
 - 2) 桐原 健 1971 「北信濃の後期弥生式土器」『一志茂樹博士喜寿記念論文集』
 - 3) 笹沢 浩 1980 「佐久地方の後期弥生式土器について」『信濃』32-4
- 2) 石 器

本遺跡のY1号・Y2号住居址からは、磨石・敲石・凹石等が出土している。これ等縄文時代より使用されている石器が弥生時代後期後半において残っており興味が持たれる。

穀類・堅果類を製粉したり、敲き割ったりするために使用したと考えられる石器類である。遺跡の南西側に広がる片貝川流域の平坦地が当時の耕作地であったと推定され、稲作も当然おこなわれていたと考えられる。しかし、こうした石器類の出土により雑穀類の耕作も盛んであったことが伺えよう。

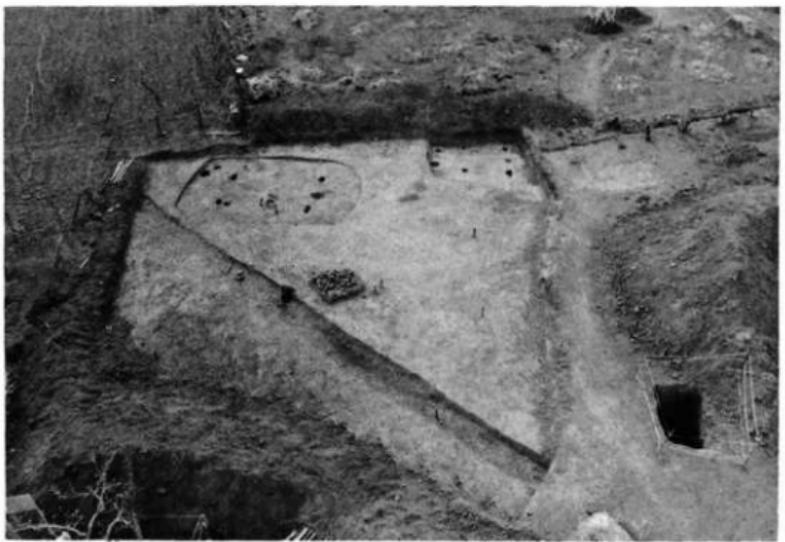
(島田 恵子)

引 用 参 考 文 献

- 佐久市教育委員会 (1974) 「佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報」
" " (1981) 「舞台場」
" " (1981) 「下小平遺跡」
" " (1984) 「上の台遺跡」
佐久市埋蔵文化財センター (1986) 「池畠・西御堂」
南佐久郡役所 (1920) 「南佐久郡志」
千曲川水系古代文化研究所 (1980) 「編年」
原口正三 (1979) 「須恵器」 講談社
臼田武正 (1980) 「佐久地方の後期弥生式土器について」『信濃』32-4
笹沢 浩 (1977) 「弥生-中部・中部高地3」『考古学ジャーナル』134
笹沢 浩 (1970) 「箱清水式土器の再検討-長野市内発見資料を中心として-」『信濃』22-4
桐原 健 (1975) 「赤色塗彩土器の出現」『信濃』27-7



1. 勝間原遺跡発掘調査区全景（北東より）



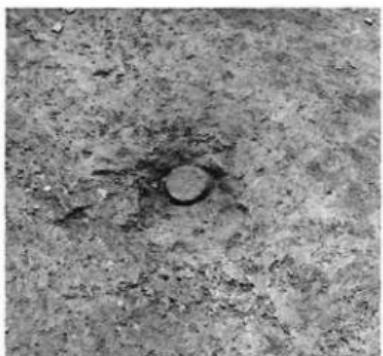
2. 勝間原遺跡発掘調査区航空写真（中部電力株式会社長野支店撮影）



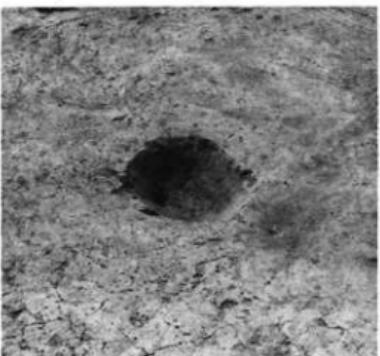
1. Y1号住居址全景（北方より）



2. Y1号住居址全景（南方より）



1. Y1号住居址炉窓蓋状態



2. Y1号住居址炉掘り下げ完了状態



3.



4.



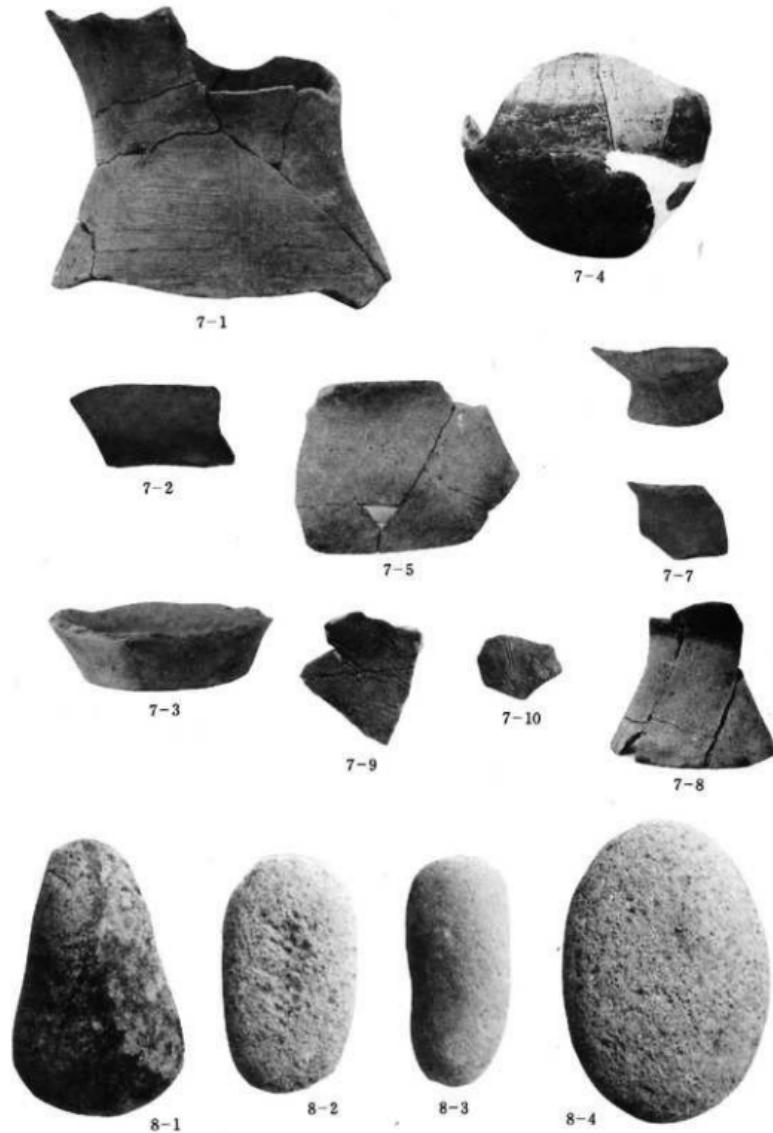
5.



6.

Y1号住居址遺物出土状態

図版 4



Y1号住居址出土遺物(約1:3)



1. Y2号住居址全景(南方より)



2.



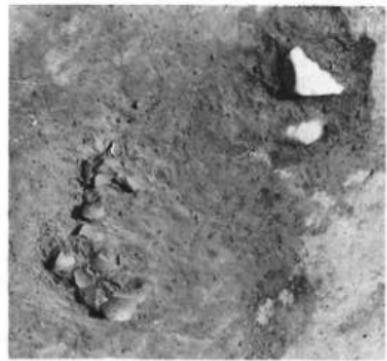
Y2号住居址全景
(北方より)



1. Y 2号住居址炉



2.



3.



4.



5.



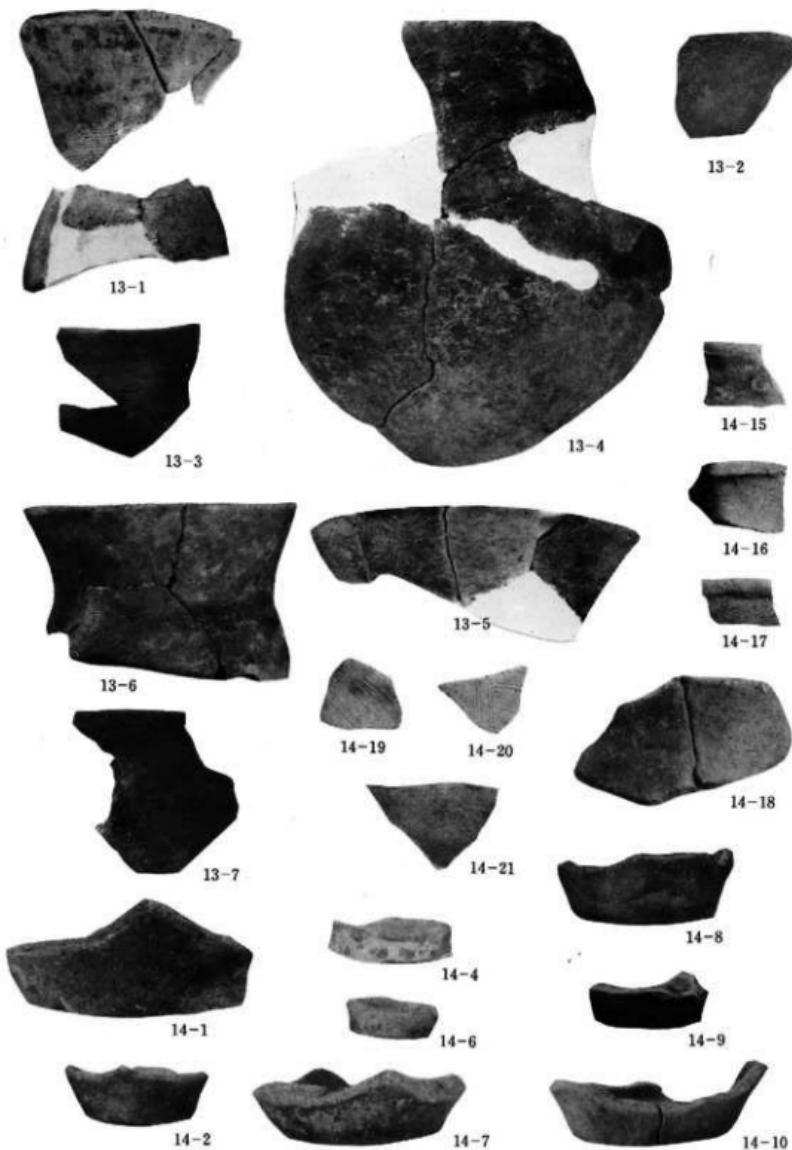
6.

Y 2号住居址遺物出土状態



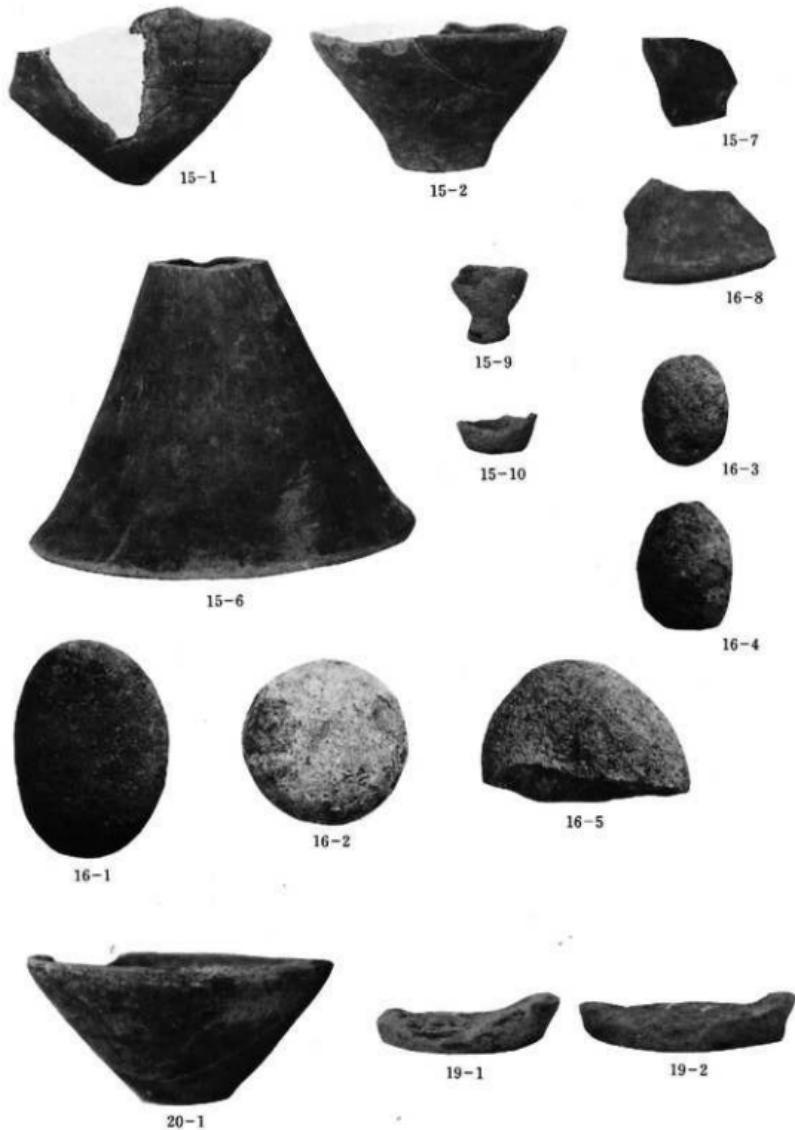
Y2号住居址遺物出土状態

圖版
8



Y 2 号住居址出土土器

図版
9



Y 2 号住居址・M 1 号溝状遺構出土遺物および検出遺物



1. M1号溝状構全景（北東より）



2. 町民のみなさんの見学会スナップ

勝間原遺跡

発行日 昭和62年11月30日

編集者 勝間原遺跡発掘調査団

発行者 白田町教育委員会

中部電力株式会社長野支店

印刷所 白田活版株式会社